

令和 6 年度 食肉需給構造分析調査委託事業 (アルゼンチン)

農林水産省 御中

2025 年 3 月

SEGMAR RESEARCH

令和 6 年度 食肉需給構造分析調査委託事業 (アルゼンチン)

農林水産省 御中

2025 年 3 月

セグマーリサーチ

SEGMAR RESEARCH
T: +81 (0)3 6222 0003
www.segmar-research.com
Arai Bldg. 8F-A,
4-11-7 Hatchobori, Chuo-ku, Tokyo, JAPAN

*For further information about this report,
please contact:*

Ivan Cardenas
icardenas@segmar-research.com

目次

1. はじめに.....	5
1.1 調査目的	5
1.2 調査方法	5
2. アルゼンチンにおける肉用牛・牛肉業界について	7
2.1 主な牛肉の品種	7
2.2 飼養形態	7
2.3 食肉処理・加工施設の種類及び特徴.....	13
3. 生産動向.....	15
3.1 飼養頭数	15
3.2 と畜頭数	20
3.3 牛肉生産量	21
4. 輸出入動向.....	22
4.1 輸出動向	22
4.2 主な輸出先国	23
5. 消費動向.....	26
5.1 食肉の消費動向	26
5.2 牛肉の消費動向	28
6. 政府による牛肉市場への介入	30
6.1 為替レート	30
6.2 輸出規制と国内価格の統制.....	31
7. 食肉業界.....	33
7.1 牛肉のバリューチェーン	33
7.2 生産コスト	34
7.3 食肉の規格	34
7.4 アルゼンチン産牛肉の品質.....	36
8. 牛肉需給の長期動向分析.....	38

図表一覧

図 1	アルゼンチンの地図	4
図 2	飼育形態別の地理的分布	8
図 3	フィードロットの分布（2025 年 1 月時点）	9
図 4	飼養頭数別の農場数割合（2018 年）	10
図 5	肉用牛飼養頭数の推移（2007-2023 年）	15
図 6	地域別肉用牛飼養頭数の割合（2023 年）	16
図 7	母牛の飼養頭数の推移（2007-2023 年）	17
図 8	去勢牛の飼養頭数（2007-2023 年）	18
図 9	と畜数の推移（2014-2023 年）	20
図 10	と畜時体重別のと畜数の推移（2014-2023 年）	20
図 11	仕向け別牛肉生産量の推移（2014-2023、トン）	21
図 12	牛肉輸出量の推移（枝肉換算、トン）	22
図 13	牛肉生産量に対する輸出の割合の推移（2014-2023 年）	23
図 14	アルゼンチン産牛肉の対中輸出の推移（商品重量、トン）	23
図 15	仕向け別輸出単価の推移（1 トンの枝肉換算量当たりの米ドル、2014-2023 年）	25
図 16	年間一人当たり牛肉消費量の推移（kg、1990-2023 年）	26
図 17	食肉別生産量増加率の推移（2010 年を 100 とした場合）	27
図 18	1kg の牛肉小売価格に相当する鶏肉及び豚肉の重量の推移（1kg の牛肉に相当する量）	27
図 19	品種別年間一人当たり消費量の推移（kg、2010-2023 年）	28
図 20	アルゼンチンにおける部位一覧	28
図 21	国別の主要牛肉カットの小売価格（USD/kg）	29
図 22	対米ドル為替レートの推移（2011 年 1 月～2024 年 9 月、1 米ドルあたりペソ）	31
図 23	牛の筋肉と骨格の比率による格付け	35
図 24	と畜時による格付け	35
図 25	牛肉格付けラベルの例	36
表 1	フィードロット登録数の推移（飼養頭数規模別）	9
表 2	フィードロット飼養頭数の推移（飼養頭数規模別）	9
表 3	アルゼンチンの主な食肉処理業者とその処理量割合（2023 年）	11
表 4	稼働中の食肉処理施設数（2024 年）	13
表 5	主な仕向け別認可施設数（2024 年）	13
表 6	州別の肉用牛飼養頭数の推移	16
表 7	州別の母牛の飼養頭数の推移	18
表 8	州別の去勢牛の飼養頭数の推移	19
表 9	飼育方法別の生産コスト	34
表 10	飼養頭数の予測	38
表 11	需給予測	39

注)

本事業は、農林水産省の委託により、SEGMAR RESEARCH が実施したものであり、本報告書の執筆の責任は SEGMAR RESEARCH にある。

【本事業担当者】

SEGMAR RESEARCH

カルデナス イバン

代表

責任者兼調査マネジャー

吉田 里絵

顧問

調査アドバイザー

ミック ケビン

リサーチアナリスト

調査員

林田 淳子

リサーチアナリスト

調査員

AZ Group

海外カウンターパート

【短縮表記一覧】

報告書中の短縮表記については以下を利用した。

短縮表記	英語/スペイン語表記	日本語表記
BSE	Bovine Spongiform Encephalopathy	牛海綿状脳症
CAN	Censo Nacional Agropecuario	農牧センサス
EU	Europe Union	欧州連合
INAC	Instituto Nacional de Carnes	ウルグアイ国立食肉研究所
INDEC	Instituto Nacional de Estadísticas y Censos	アルゼンチン国家統計局
IPCVA	Instituto de Promoción de la Carne Vacuna Argentina	アルゼンチン牛肉・仔牛肉振興協会
ROE	Registro de Operaciones de Exportación	輸出登録制度
SENASA	Servicio Nacional de Sanidad y Calidad Agroalimentaria	アルゼンチン国家農畜産品衛生管理機構
USDA	United States Department of Agriculture	米国農務省
WOAH	World Organization for Animal Health	国際獣疫事務局

図 1 アルゼンチンの地図



1.はじめに

1.1 調査目的

本委託事業では、世界及び我が国の食肉貿易に直接的・間接的に影響を与え得る南米諸国のうちアルゼンチン（以下「対象国」という。）の牛肉の生産・流通構造等に係る情報収集及び調査を行い、我が国の食肉の安定供給に係る政策を検討するに当たっての資料とする。

1.2 調査方法

本案件の実施は提案書に沿って下記の 5 段階で実施した。

- 詳細な計画策定と事前準備
- 事前情報収集（文献調査及びデスクトップ調査）
- 現地調査の実施
- 情報分析、報告書草稿の作成
- 最終報告書の作成及び提出

事前情報収集：

事業の実施中は継続して対象国の牛肉の生産・流通構造等に係る様々な情報の収集を行った。主な情報収集先はアルゼンチン経済省バイオ経済局（旧農畜水産省）、アルゼンチン農牧技術院及び USDA 等である。

参考とした主な文献やデータ収集先は以下のとおりである。

- アルゼンチン経済省バイオ経済局畜産部門（Subsecretaría de Ganadería, Secretaría de Bioeconomía del Ministerio de Economía）
- アルゼンチン国家農畜産品衛生管理機構（SENASA: Servicio Nacional de Sanidad y Calidad Agroalimentaria）
- アルゼンチン牛肉・仔牛肉振興協会（IPCVA）
- 米国農務省（USDA）
- 牛肉チェーンの戦略的ガイドライン 2022-2032
- ウルグアイ国立食肉研究所（INAC）
- アルゼンチン国家統計局（INDEC）

現地調査の実施：

2024 年 11 月 11 日から 15 日の 5 日間でブエノス・アイレス市及びブエノス・アイレス州サン・アントニオ・デ・アレコ（San Antonio de Areco）市を訪問し、政府担当部局、業界団体、生産者、肥育業者、卸売市場、と畜加工業者やフィードロット会社など合計で 14 社をインタビューした。現地では、生産から輸出までの関係者、そして政府機関へのインタビューを行うことにより、バリューチェーン全体の流れを把握した。

ヒアリング先：

組織名	ヒアリング数
アルゼンチン経済省バイオ経済局畜産部門	1
アルゼンチン・フィードロット協会	1
カニューエラス畜産卸売市場及び 2 社の市場関係者（Oromi 社及び Monasterio 社）	3
種牛、一貫生産者	1
と畜加工業者	1
フィードロット会社	1
繁殖業者	2
精肉業者	1
輸出業者	1
アルゼンチン牛肉・仔牛肉振興協会（IPCVA）	1
アルゼンチン・アンガス牛協会	1
合計	14

2. アルゼンチンにおける肉用牛・牛肉業界について

2.1 主な牛肉の品種

アルゼンチンにおける主な肉用牛の品種として、英国原産のアバディーン・アンガス種及びヘレフォード種に加え、これらとブラーマン種との交雑種であるブランガス種（ブラーマン・アンガス種）及びブラフォード種（ブラーマン・ヘレフォード種）が挙げられる。アルゼンチン国家統計局（INDEC）が公表した農牧センサス（CNA 2018）の最新データによれば、全飼養頭数の55%がアバディーン・アンガス種、19%がヘレフォード種、16%がブラフォード種、残りがブランガス種である。

2.1.1 品種の特徴

英国原産のアバディーン・アンガス種は、アルゼンチンにおける主要な肉専用種である。本品種は筋肉量が豊富で、脂肪交雑、柔らかさ、ジューシーさ、旨味などの面で良質な肉を生産すると言われる。また、妊娠・分娩のしやすさや母牛としての適性などの繁殖能力の高さ、寿命の長さも備え、全体的にバランスが良い。英国原産のヘレフォード種もアルゼンチンに多い肉専用種であり、耐暑性・耐寒性や草地利用性に優れ、アルゼンチンのすべての地域に適応可能な品種とされる。

また、アルゼンチン北部に多く分布するのは交雑種である。インド系品種であるブラーマン種は耐暑性に優れた頑丈な品種であり、ブランガス種は、アンガス種の肉質と繁殖能力の高さを併せ持つ。ブラフォード種はヘレフォード種の気候風土への適応能力の高さと放牧適正を併せ持つ。

2.2 飼養形態

CNA 2018によれば、肉用牛飼養頭数の割合で見ると、繁殖から肥育・仕上げまでのすべてのプロセスを行う一貫生産農場で飼養される牛が最も多いが、農場数の割合で見ると約34%にとどまる。このことから、一貫生産農場には大規模農場が多いことがうかがえる。繁殖農場の数は全体の約59%と半数以上を占める。気候風土的に家畜の生産性が低く農業にも適さない土地にも分布しており、畜産業の中で最も広範な地域で行われている。

CNA 2018によれば、飼養形態の割合は以下のとおりである。

- 一貫生産（Ciclo completo）：繁殖から肥育・仕上げまでのすべてのプロセスを行う飼養形態。全農場の34%を占める。（米国向けのヒルトン枠向けはここに含まれる）
- 繁殖（Cría）：繁殖のみを行う飼養形態。全農場の59%を占める¹。
- 肥育（Recría）：肥育のみを行う飼養形態。基本的には牧草肥育（一日平均増体重は約600g/日）。全農場の2%を占める²。
- 長期肥育（Invernada）：肥育のみを行うが、牧草肥育に加え、さらに数カ月の穀物肥育を行う飼養形態。全農場の5%を占める。

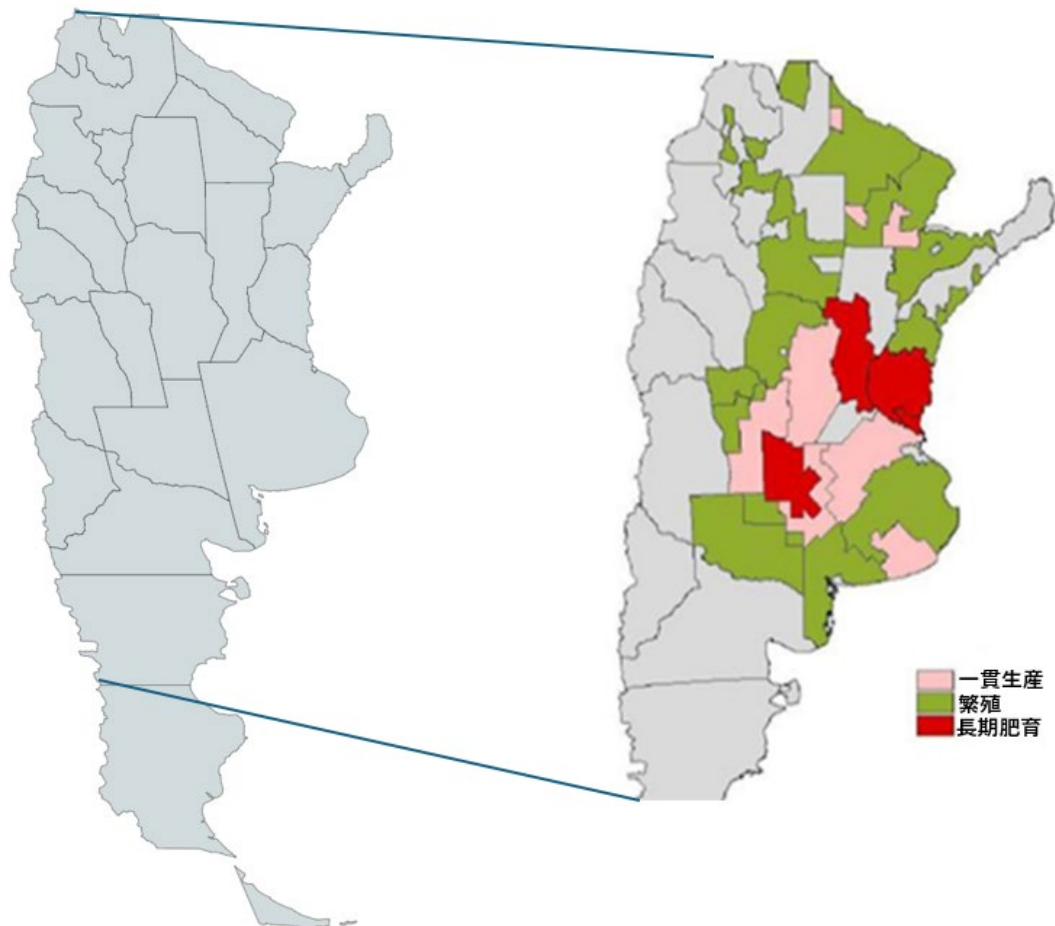
¹ 約180kgの素牛を飼育することを目的とした活動。

² 素牛の筋骨格系の発達を目的とし、その後のと畜のための仕上げを行う活動。

- 遺伝子農家（Cabaña）：繁殖雌牛や種雄牛を飼養する農場は全農場の 0.3%を占める。

図 2 はアルゼンチンの経済省バイオ経済局（旧農林畜産省）が作成した飼養形態別の分布図である。一貫生産や長期肥育が農業に適した中央部に限局する一方で、繁殖は比較的広範な地域で行われている。

図 2 飼育形態別の地理的分布



出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局

なお、アルゼンチンにおいて、穀物肥育では 24～28 カ月の肥育期間であるが、牧草肥育では約 40 カ月もの肥育期間を要するという。また、国内外で求められる肉質が異なり、と畜時の生体重量は国内向けの牛が 270～340kg、輸出向けの牛が 340～390kg と差が見られる。国内向けは肥育期間が短く、輸出向けは肥育期間が長い傾向にあるという。

次に、一般的に大規模肥育場を意味するフィードロットについては、アルゼンチン国家農畜産品衛生管理機構（SENASA）が 2008 年以降の統計データを公表している。同データにおいては、フィードロットを「一貫生産あるいは肥育や長期肥育の飼養形態を取り、仕切られた区域内で牛を飼養し、穀物のみ給与する農場」と定義されている³。

表 1 は 2008 年からのフィードロットの登録数と肥育頭数の推移を表している。5,000 頭以上のフィードロットは数及び飼育頭数が増加傾向にある。

³ [Microsoft Word - Informe Feed Lot.doc](#)

表 1 フィードロット登録数の推移（飼養頭数規模別）

	500 頭まで	501－1,000 頭	1,001 - 2,500 頭	2,501 - 5,000 頭	5,001 - 10,000 頭	10,000 頭より多い	合計
2008	678	321	268	108	29	16	1,420
2009	1,257	391	360	127	39	15	2,189
2010	1,543	325	284	86	27	13	2,278
2011	1,237	252	156	49	15	8	1,717
2013	1,153	219	200	68	28	11	1,679
2021	513	218	266	100	38	13	1,148
2023	439	189	296	136	42	24	1,126
2025	474	222	240	102	51	15	1,104

出所）SENASA なお、公表されていない年がある。また、公表月が年によって異なる点に留意。

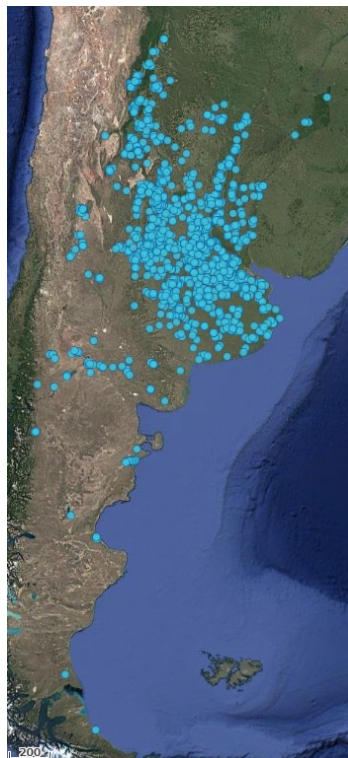
表 2 フィードロット飼養頭数の推移（飼養頭数規模別）

	500 頭まで	501－1,000 頭	1,001 - 2,500 頭	2,501 - 5,000 頭	5,001 - 10,000 頭	10,000 頭より多い	合計
2008	148,758	234,095	423,578	373,452	204,286	239,638	1,623,807
2009	266,085	283,399	568,889	428,860	269,931	301,270	2,118,434
2010	255,005	229,920	441,580	291,091	176,143	207,151	1,600,890
2011	182,469	181,346	244,871	171,925	103,719	107,099	991,429
2013	139,672	157,695	305,872	233,019	185,870	223,309	1,245,437
2021	99,508	158,198	409,707	335,326	257,361	272,364	1,532,464
2023	88,000	138,644	472,840	476,915	292,014	468,842	1,937,255
2025	94,369	164,271	383,659	353,106	345,994	342,329	1,683,728

出所）SENASA なお、公表されていない年がある。また、公表月が年によって異なる点に留意。

SENASA の統計によれば、2025 年におけるフィードロット 1 農場当たり平均飼養頭数は 1,525 頭である。なお、フィードロットは中央部に多く存在し、最も多く集中している州はアルゼンチン中東部に位置するブエノス・アイレス州である（図 2）。

図 3 フィードロットの分布（2025 年 1 月時点）



出所）SENASA

ブエノス・アイレス州内のフィードロット

ブエノス・アイレス州本農場は元々委託肥育農家として始まったが、少しずつ土地を拡大し、パートナーとともに子牛の繁殖や穀物生産に取り組み始め、そして現在ではフィードロットを運営している。飼料穀物の生産から小売業用パック肉の販売まで一環で行っている。なお、現在の社長は三代目である。

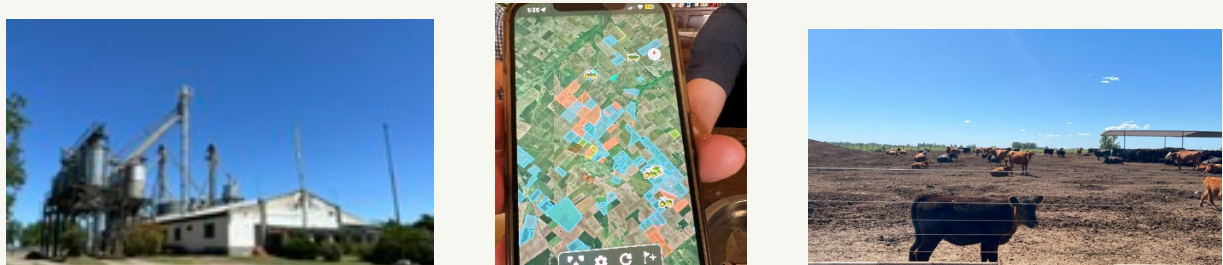
本フィードロットでは、三つのほ場で最大 12,000 頭の牛を肥育することが可能である。また、パッカー向けに「ホテル貸し」と呼ばれる預託事業も行っており、全飼養頭数（9,000 頭）の約 4 割に相当する約 3 万 5 千頭を預かっている。預託料は、主に飼料代、医薬品代、サービス料から成る。

敷地面積は 10,000 ha にも及び、55 人の従業員が従事する。ほ場で生産しているトウモロコシやその他の穀物を飼料として給与している。濃厚飼料も購入しているがトウモロコシはほぼ 100% 自給である。

社長によると、20～30 年前にはグラスフェッドが好まれていたが、現在では穀物肥育の牛肉が好まれるようになるなどアルゼンチン人の嗜好が変化しているという。この変化に合わせるようにフィードロットを拡大してきた。

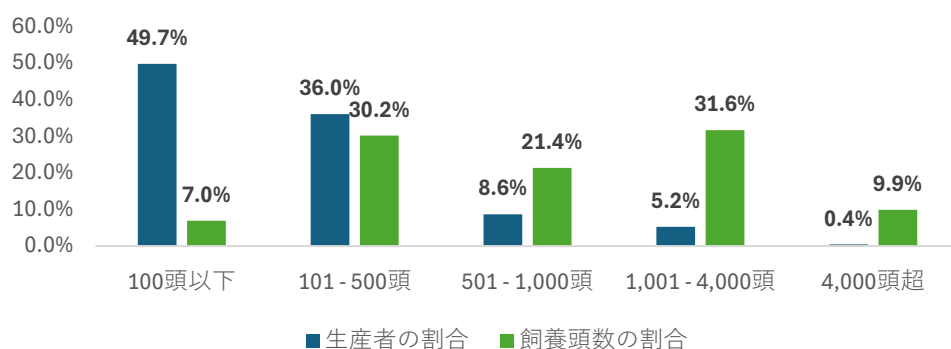
アルゼンチンのフィードロットは屋外にあるが、一部の区間には日よけのための屋根が設置されている。また、牛をフィードロットに導入する際には、最初の 15 日間は馴致のために牧草と穀物を混ぜた飼料を与え、それ以降は穀物のみの飼料を与える。

ほ場は放牧と穀物生産に使っており、二度の放牧を行った後、一度穀物生産を行い、サイクルで回している。本農場では繁殖も行っており、種雄牛も雌牛も飼養している。また、人工授精にも取り組んでいるが、人工授精と種雄牛との自然交配を組み合わせることで受精率を高めているという。



アルゼンチンにおける肉用牛飼養農場数は全体で 187,090 であり、そのうち約 50%は飼養頭数 100 頭以下の農場である（図 4）。しかしながら、大規模生産者の市場占有率は他の主要生産国と比較して低く、価格を形成できるほど大きくはない点がアルゼンチンの肉用牛飼養動向の特徴の一つとして挙げられる。

図 4 飼養頭数別の農場数割合（2018 年）



出所）CNA 2018

牛肉処理・加工施設を見てみると、現在 341 施設が稼働中であり、トップ 10 の食肉処理・加工事業者は全牛肉処理量の約 25% を占めるに過ぎない。米国ではカーギル社、JBS USA 社、ナショナル・ビーフ・パッキング社、タイソン・フーズ社が全牛肉処理量の 85% を占め⁴、ウルグアイではミネルバ・フーズ社だけで全牛肉処理量の 45% を占めていることからみても、アルゼンチンの畜産業界の細分化が見て取れる。

表 3 アルゼンチンの主な食肉処理業者とその処理量割合（2023 年）

企業グループ	資本	活動内容	仕向け地	と畜頭数（2023年）	市場占有率
Grupo Beltrán	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	579,075	3.99%
Grupo Coto	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	455,003	3.14%
Grupo Swift	ブラジル	一貫生産	国内/輸出	432,331	2.98%
Rioplatense	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	357,957	2.47%
Arre Beef SA	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	330,602	2.28%
Grupo Gorina	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	327,942	2.26%
Grupo Friar	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	301,873	2.08%
Marfrig Quickfood	ブラジル	一貫生産	国内/輸出	300,710	2.07%
Grupo Mattievich	アルゼンチン	一貫生産	国内/輸出	276,329	1.90%
AMT Sud SA	米国	一貫生産	国内/輸出	230,335	1.59%
Total País				14,512,770	24.75%

*一貫生産：肥育、と畜処理、カット肉として真空パック又はトレーにしてスーパーマーケットなどに販売
出所）アルゼンチン経済省パイオ経済局

最大手の Grupo Beltrán 社は 100%アルゼンチン資本であり、国内に 8 か所の牛肉処理・加工施設を有している。従業員は 2,000 人を超え、提携生産者も 2,000 に上る。同社は牛肉だけではなく、豚肉もと畜処理しており、米国、カナダ、ブラジル、EU、ロシアや中国に輸出している⁵。

Grupo Coto 社は現在では大手スーパーマーケットチェーンとしてアルゼンチンでは有名であるが、もともとは牛の生産とと畜から始まり、その後精肉店、そして現在ではスーパーマーケットチェーンへと事業を拡大した⁶。また、同社はアルゼンチン資本としては同国最大のスーパーマーケットチェーンであり、牛の一部は提携生産者から購入している他、自社生産にも取り組んでおり、生産から小売、さらには輸出まで実践している企業でもある。後述の EU 向けヒルトン枠でも輸出している他、牛皮等の副産物も生産販売している⁷。

Grupo Swift 社はブラジルの食肉大手企業であるミネルバ・フーズ社の子会社であり、アルゼンチンに 5 か所の牛肉処理・加工施設と物流拠点を有しており、最近では牛の生産農場 Las Lilas を買収している⁸。

このような肉用牛・牛肉業界の構造がある中で、アルゼンチンの肉用牛・牛肉市場は完全競争市場に極めて近い特徴を示している。価格は需給を反映した自由競争によって形成される。ブエノス・アイレスに位置する世界最大規模の牛取引市場であるカニエラス農畜産市場では、毎日約 1 万頭もの牛がセリにかけられる。

⁴ USDA

⁵ [GB Argentina](#)

⁶ [LOS RICOS DE ARGENTINA](#)

⁷ [Institucional – La historia de Coto, su presente y su futuro.](#)

⁸ [Home - SWIFT ARGENTINA S.A.](#)

カニユエラス卸売市場

カニユエラス卸売市場は以前ブエノス・アイレス市内にあったが、2020 年に現在のブエノスアイレス州カニユエラス市に移転した。全て仲買人や業界関係者の出資で運営され、1,500 キロ圏内の牛が搬入される。200 ヘクタールの敷地のうち市場は 30 ヘクタールを占め、全体の収容能力は約 11,000 頭に及ぶ。なお、残りの敷地はアンガス協会等の業界関連施設に貸し出されている。主に国内向けに販売されるが、中国向けにも販売されている。中国向けとしては安価な廃用牛が多いという。なお、EU 向けの牛はここで売買されない。

農場から市場までの輸送コストは生産者が負担し、仲買人は生産者からの要求を受けて、手数料をつけて買付人に販売する。市場には 45 社の仲買人が関わり、食肉処理・加工業者、スーパーマーケットや精肉店が主な買い手となる。一日あたりの売買頭数は約 6,000 頭、多い日で 12,000 頭に達し、全国のと畜頭数の 1 割を占める。販売方法は一つの柵に同質の牛を約十頭入れ、柵ごとに売買する形式である。柵の情報（牛の数、柵全体の体重、出身地、生産者名、そしてカテゴリー（例えば、雌牛、子牛など））は仲買人が提供し、販売価格に影響を与える。競売はキログラム単位で値段が決まる。

牛はトレーサビリティを確保しつつ、その日のうちに販売先へ搬出され、販売先への輸送費は買い手負担となる。



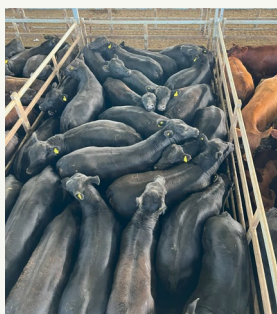
市場の全景



柵に入れられる牛、上でセリが行われる



中国向けの廃牛



国内向けの牛



搬出される牛、入り口と出口が異なる



移動に使われるトラック、搬入と搬出の際、洗浄が行われる

2.3 食肉処理・加工施設の種類及び特徴

食肉処理は、全国段階の食肉処理・加工施設（frigorificos）と地方段階の食肉処理・加工施設の 2 種類の施設で行われている。

2.3.1 全国段階の食肉処理・加工施設

全国段階の食肉処理・加工施設はその活動内容と衛生認可の種類によって分類される。まず、活動内容によって、以下の三つに分類される。

1. フルサイクル処理・加工施設：牛のと畜と牛肉の加工を行う。
2. 第一サイクル処理・加工施設：一般的に地元市場向けの牛のと畜のみを行う。
3. 第二サイクル処理・加工施設：他の施設でと畜された牛肉の加工のみを行う。

次に、衛生認可によって、以下の三つに分類される。

1. タイプ A：全国流通と輸出のために SENASA によって認可された食肉処理・加工施設。
2. タイプ B：州内流通のために州政府の認可を受け、一日当たりの最大と畜頭数を 150 頭とする食肉処理・加工施設。
3. タイプ C：地方流通のために地方自治体の認可を受けた食肉処理・加工施設。

2.3.2 地方段階の食肉処理・加工施設

地方段階の食肉処理・加工施設については、州政府の認可を受けているものの、流通は市町村段階のみに限定するとともに、一日当たりの最大と畜頭数を 15 頭と定めている。

現在、全国段階及び地方段階の食肉処理・加工施設は合計 341 施設が稼働し、そのうち 169 施設が輸出認可を受けているが、172 施設は国内市場への供給のみとなっている（表 4、5）。

表 4 稼働中の食肉処理施設数（2024 年）

輸出認可を受けている施設数	169
国内市場向けの認可を受けている施設数	172
合計数（稼働中）	341

出所）SENASA

表 5 主な仕向け別認可施設数（2024 年）

イスラエル	25
中国	43
日本	1
EU	39
米国	29

出所）SENASA

なお、アルゼンチンでは通常、食肉処理・加工施設において処理された牛肉は、48 時間以内に消費者の手に渡るため、食肉処理・加工施設の保管能力は限られている。施設内の保管庫は主に輸出向け食肉の保管に用いられ、コンテナ準備中・輸送前の一時保管や顧客からの注文に対応するための備蓄保管にのみ使われているという。そのため、アルゼンチンにおける牛肉の在庫量はそれほど多くはないとみられる。

食肉処理・加工業者（FRIMSA 社）

同社は、1991 年に創業したアルゼンチン中部のブエノスアイレス州ベレン・デ・エスコバル市に位置する食肉処理加工業者であり、施設は元々、馬のと畜工場であった。最初は州内向けにと畜加工を行っていたが、その後全国に広がり、2016 年からは輸出も始めた。現在では 50 カ国に輸出しており、コーシャやハラールに対応している。特にイスラエル向けの輸出が増え、コーシャ対応のための設備も増設している。

中国向けの輸出は 2018 年に始まり、価格の変動に対応しながら行っている。輸出には SENASA の許可が必要で、輸出先によっては事前登録も必要である。施設の処理能力は 1 日 700～800 頭、そのうち 7～8 割が輸出されている。冷凍倉庫の収容能力は 2000 トン、従業員数は 700 人である。

国内向けには部分肉で販売しているが、海外向けは枝肉の販売が多い。今後の目標は毎日のと畜頭数を 1000 頭に増やすことであるという。しかし、国内の飼養頭数の少なさが課題であり、飼養頭数の増加と国内市場の確保が重要とのことである。

本施設関係者によると、2025 年以降にアルゼンチンの輸出可能性が増すと見込んでいるという。過去数年で中国向けの輸出が増加したことを受けて、設備投資も増やした。今後は付加価値の高い商品の輸出を目指しているとのことである。

契約する肥育業者を探しているが、インフレの影響で長期契約が難しい。対日輸出については、脂肪交雑よりも生産量の増加に注目すべきと考えている。今後 500 キロ以上の牛の生産を目標としている。



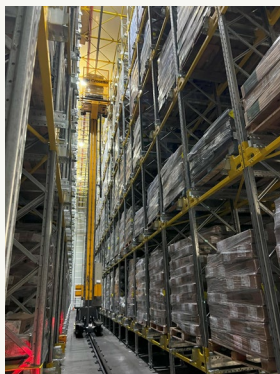
中国向け商品



カット部位の商品



施設内の様子



3. 生産動向

3.1 飼養頭数

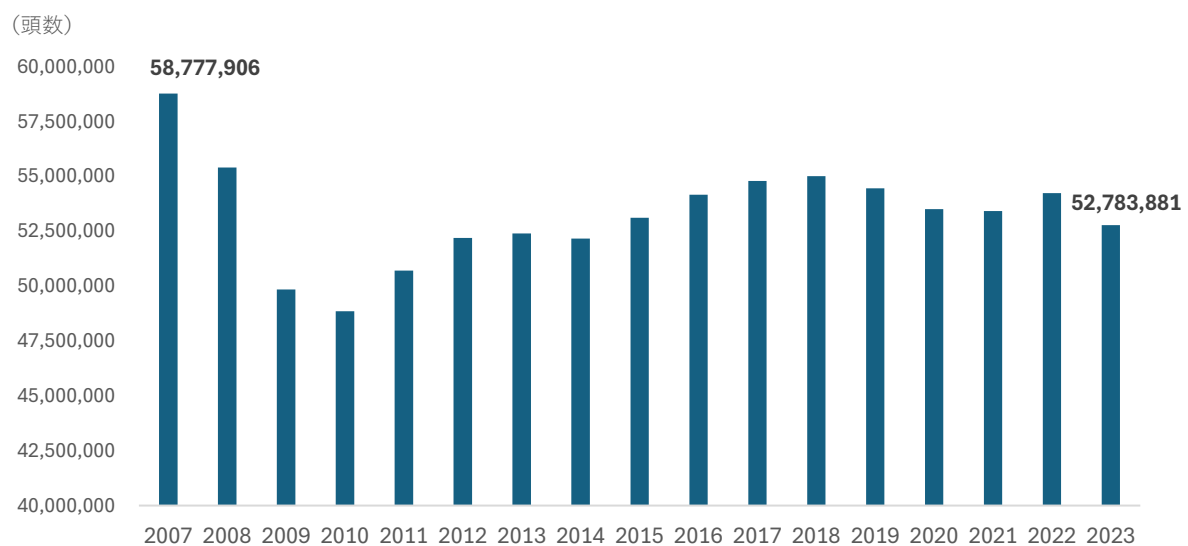
SENASA によると、2023 年における肉用牛総飼養頭数は世界第 5 位となる 5,278 万頭に上った（図 5）⁹。一方で、近年は変動が見られ、2007 年には 5,870 万頭に達したが、その 4 年後である 2010 年には 4,800 万頭台にまで減少した。2008 年から 2009 年にかけて生じた干ばつがその要因であり、牛肉の主要生産地であるアルゼンチン中部を含むパンパ地方に肉用牛・牛肉業界に深刻な影響を与えた。さらに、政策が後手に回ったことも事態の悪化につながったとも言われている。

また、アルゼンチンでは農産物の国際価格の上昇（2003～2008 年）を背景とした大規模農業の進展が見られ、アルゼンチン中部などの農業に適した地域では肉用牛生産から他の農産物の生産への切り替えが進み、同地域から周辺（北東部、北西部や西部）などの農業適性の低い地域に肉用牛を移動させる一因となった。

農業が盛んな地域における飼養頭数は回復しなかったものの、農業適性の低い地域では増加したことによって、2012 年以降の肉用牛の総飼養頭数は堅調に推移している。一方で、母牛一頭当たり子牛出生頭数や一頭当たり枝肉重量は長期にわたって伸び悩むなど飼養効率や生産性の向上には至らず、牛肉生産量に大きな増加は見られなかった。

なお、2021 年から 2022 年に飼養頭数が減少した要因としては、2021 年から 2023 年にかけて生じたラニーニャ減少によって、年間降水量が平年を下回り、気温が平年を上回ったことが挙げられる。2023 年も気候の回復は見られず、3 年連続の干ばつの影響もあり、飼養頭数は伸び悩む結果となった。

図 5 肉用牛飼養頭数の推移（2007-2023 年）

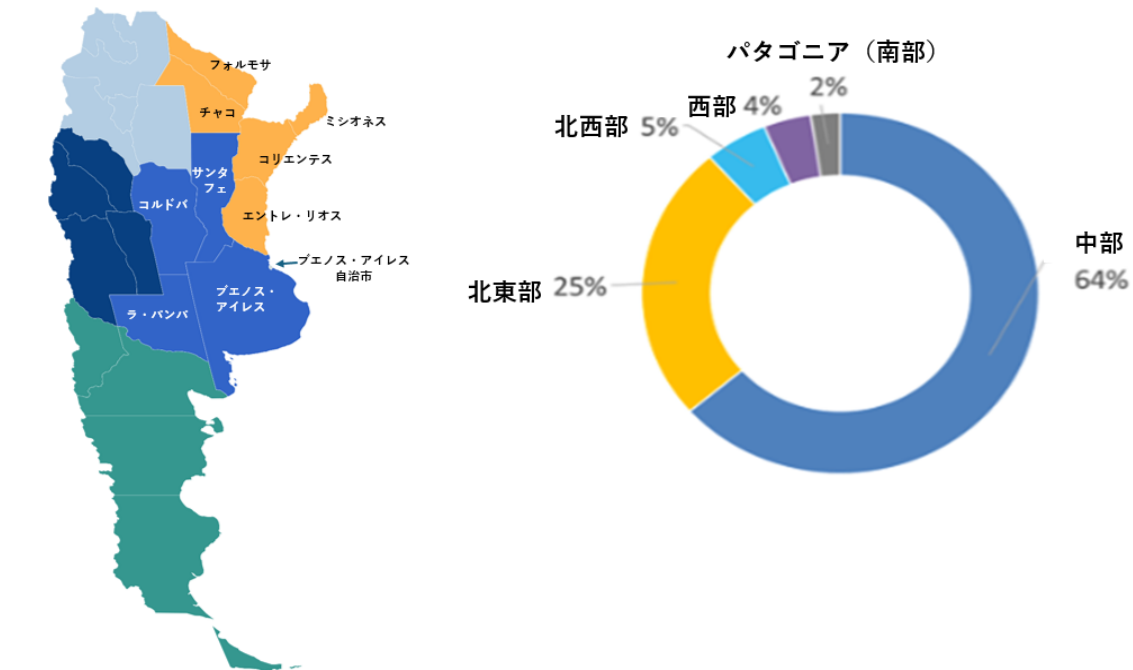


出所) SENASA

⁹ USDA

アルゼンチンにおける主な肉用牛の生産地は、同国中部に位置し、肥沃な土壌を有する平原であるパンパ（ブエノス・アイレス州、コルドバ州、ラ・パンパ州東部、サンタ・フェ州南部）である。その中でもブエノス・アイレス州は全飼養頭数の 35% を占める。同州内では、南東部に広がるクエンカ・デル・サラド地域が子牛と未經産牛の主要生産地である。

図 6 地域別肉用牛飼養頭数の割合（2023 年）



出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

表 6 州別の肉用牛飼養頭数の推移

州	2017	2018	2019	2020	2023
ブエノス・アイレス	18,615,034	18,845,516	19,128,655	19,188,065	19,737,872
サンタ・フェ	6,084,443	6,069,441	6,081,842	5,947,507	6,141,311
コルドバ	4,754,896	4,895,403	4,812,662	4,612,003	4,488,619
エントレ・リオス	4,187,378	4,250,183	4,271,715	4,340,050	4,386,742
コリエンテス	4,735,137	4,574,121	4,461,885	4,413,702	4,364,338
ラ・パンパ	3,231,654	3,302,560	3,298,533	3,056,944	3,237,640
チャコ	2,670,780	2,662,728	2,550,590	2,428,741	2,360,867
フォルモサ	1,761,043	1,744,775	1,741,660	1,659,319	1,671,782
サン・ルイス	1,621,632	1,686,942	1,650,750	1,500,536	1,421,157
サンティアゴ・デル・エステロ	1,604,255	1,655,702	1,641,515	1,563,957	1,205,037
サンルタ	1,227,823	1,348,469	1,395,430	1,332,633	1,130,118
リオ・ネグロ	625,068	623,726	668,466	676,916	707,592
メンドサ	456,043	490,284	475,084	434,801	397,967
ミシオネス	430,742	415,557	393,221	393,846	375,209
ネウケン	211,494	193,873	203,337	211,534	216,168

チュブット	218,318	220,964	227,895	222,019	198,258
ラ・リオハ	181,642	182,579	183,313	189,823	176,673
カタマルカ	264,303	285,177	264,647	248,698	173,955
トゥクマン	173,989	171,244	168,640	161,920	134,365
フファイ	113,552	116,023	119,921	118,418	84,756
サンタ・クルス	99,081	102,618	106,670	107,645	83,779
ティエラ・デル・フエゴ	44,101	46,097	49,979	50,943	46,376
サン・フアン	41,364	45,126	49,391	50,769	43,300
ブエノス・アイレス自治市	15	11	7	15	-
合計	53,353,787	53,929,119	53,945,808	52,910,804	52,783,881

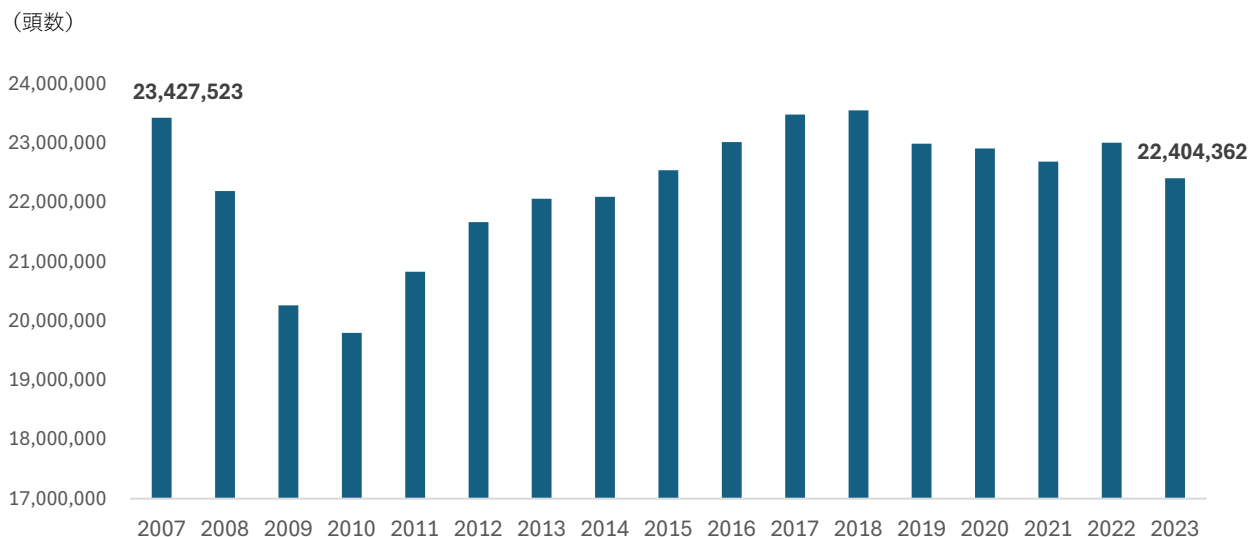
出所) SENASA 2021 年及び 2022 年のデータはない。

肉用牛の中でも、カテゴリーによって異なる動きが見られる。母牛と去勢牛に焦点を当てると、母牛の場合、2008～2009 年の干ばつ後、飼養頭数が大きく回復しており、現在の母牛の飼養頭数は 2008 年と同水準に戻っている。しかし、母牛の生産性（1 頭当たりの子牛生産頭数）は、母牛 1 頭/1 年あたり 0.6 頭となり、生産性は低く、過去数十年間、大きな変動もなく繰り返されてきている。

その主な理由としては、将来に対する不透明性、管理技術の低さ、気候変動、文化的問題などが挙げられる。

その結果、去勢牛の飼養頭数は年々減少傾向にあり、現在、去勢牛の頭数は 2007 年の 50% しかない。このような状況を踏まえ、アルゼンチンでは他飼育場での肥育契約（「ホテル契約」）が増えており、第三者によるフィードロットでの生産が増加傾向にある。正式な統計はないが、フィードロットでと畜される牛は年間 200 万頭とされており、400 万トンの牛肉が生産されている¹⁰。

図 7 母牛の飼養頭数の推移（2007-2023 年）



出所) SENASA

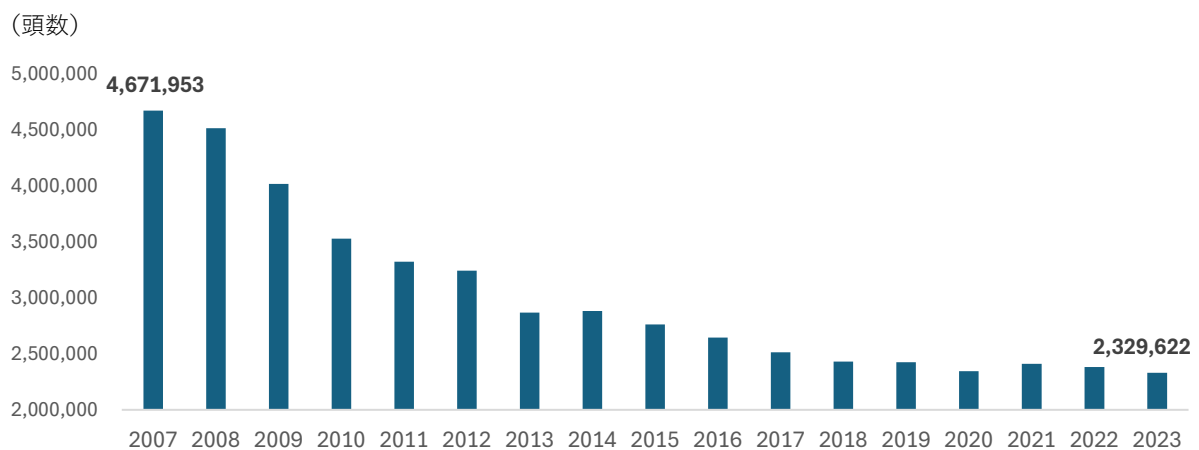
¹⁰ インタビューより。

表 7 州別の母牛の飼養頭数の推移

州	2017	2018	2019	2020	2023
ブエノス・アイレス	8,125,129	8,338,957	8,375,803	8,270,577	8,112,645
サンタ・フェ	2,556,162	2,544,792	2,513,450	2,456,048	2,542,874
コリエンテス	2,215,736	2,188,541	2,125,695	2,068,668	1,924,398
エントレ・リオス	1,827,303	1,854,757	1,831,495	1,822,567	1,798,660
コルドバ	1,898,643	1,936,914	1,916,491	1,821,428	1,750,104
ラ・パンパ	1,377,218	1,433,979	1,440,733	1,367,621	1,387,286
チャコ	1,255,385	1,277,244	1,238,340	1,187,015	1,138,837
フォルモサ	809,162	804,287	797,878	764,986	746,081
サン・ルイス	763,292	784,877	772,606	737,682	719,395
サンティアゴ・デル・エステロ	676,020	689,487	678,942	665,256	526,527
サルタ	492,017	515,843	530,376	519,343	447,761
リオ・ネグロ	320,033	322,331	346,151	359,075	364,560
メンドサ	239,433	258,504	259,512	242,697	215,243
ミシオネス	192,656	189,238	179,718	177,195	168,056
ネウケン	109,734	102,457	107,871	111,355	117,776
チュブット	98,412	99,281	99,392	101,569	93,369
ラ・リオハ	84,418	89,062	88,789	88,486	86,624
カタマルカ	114,764	120,633	112,173	105,944	81,763
サンタ・クルス	52,813	54,660	57,866	58,885	49,171
トゥクマン	67,254	65,768	65,416	65,467	49,052
フファイ	47,088	47,450	48,265	49,366	36,535
ティエラ・デル・フエゴ	21,113	22,495	24,546	25,096	26,223
サン・フアン	18,252	19,960	22,022	24,312	21,422
ブエノス・アイレス自治市	6	4	3	3	-
合計	23,362,043	23,761,521	23,633,533	23,090,641	22,404,362

出所）SENASA 2021 年及び 2022 年のデータはない。

図 8 去勢牛の飼養頭数（2007-2023 年）



出所）SENASA

表 8 州別の去勢牛の飼養頭数の推移

州	2017	2018	2019	2020	2023
ブエノス・アイレス	607,382	624,008	607,346	545,478	538,986
サンタ・フェ	460,674	403,909	397,007	378,316	381,352
エントレ・リオス	302,885	314,273	312,498	315,912	380,108
コリエンテス	303,571	247,230	223,386	212,554	266,135
ラ・パンパ	271,601	283,261	270,030	217,753	215,086
コルドバ	259,055	257,657	250,556	217,806	182,446
チャコ	118,052	117,451	97,725	85,915	86,630
サン・ルイス	85,769	92,490	90,351	61,331	59,396
サンティアゴ・デル・エステロ	103,083	85,036	87,447	82,758	55,939
フォルモサ	71,821	66,263	68,857	54,729	51,090
サルタ	85,563	95,750	104,837	93,537	42,484
ミシオネス	24,260	19,923	17,658	16,581	13,331
メンドサ	14,739	16,607	13,035	12,889	9,589
リオ・ネグロ	12,876	10,043	10,841	9,707	8,633
チュブット	8,517	8,308	8,268	8,833	7,009
カタマルカ	13,014	12,232	10,827	10,533	6,842
トゥクマン	12,359	11,129	9,211	8,419	5,804
フファイ	9,060	8,975	8,699	7,896	5,767
ネウケン	5,979	3,412	3,401	4,129	5,225
ラ・リオハ	4,818	4,717	4,923	7,150	2,953
サンタ・クルス	3,646	3,638	3,415	3,269	2,393
サン・フアン	3,009	3,143	2,363	2,326	1,473
ティエラ・デル・フエゴ	1,876	2,323	3,531	2,540	951
ブエノス・アイレス自治市	1	2	-	4	
合計	2,783,610	2,691,780	2,606,212	2,360,365	2,329,622

出所）SENASA 2021 年及び 2022 年のデータはない。

アルゼンチンにおける穀物肥育の進展と、輸出市場に対する政府の介入（輸出の制限）が理由で、多くの輸出生産者が輸出向けの体重の重い牛（440～480kg）の生産ではなく、早期の現金回収が可能な短期間の肥育を選択している。

現在のアルゼンチンの家畜は多くの生産可能性を持っているが、約 800 万頭の母牛が子牛を産んでおらず、と畜場に送られる牛の平均体重は世界の主要生産国と比べて非常に低い。米国の平均と畜時生体重は 340kg、ウルグアイでは 260kg である。その一方、アルゼンチンでは 1 頭あたりの平均枝肉重量は 226kg¹¹ に過ぎない。

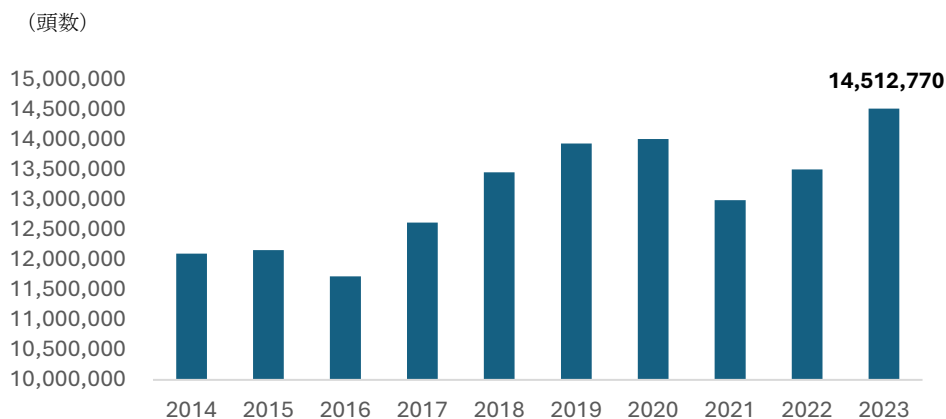
¹¹ USDA

3.2 と畜頭数

過去 10 年間、牛の食肉処理頭数は年間約 1,300 万頭であった。アルゼンチンの食肉処理の特徴は、若くて軽量の牛の割合が高いことである。これにはいくつかの要因が関係しており、消費者が、若くて軽量の家畜の肉を好むこと、輸出がしにくい状況（政府介入などが原因）であること、政治やマクロ経済が不安定なアルゼンチンでは投資期間（肥育期間）が短いこと、などが挙げられる。

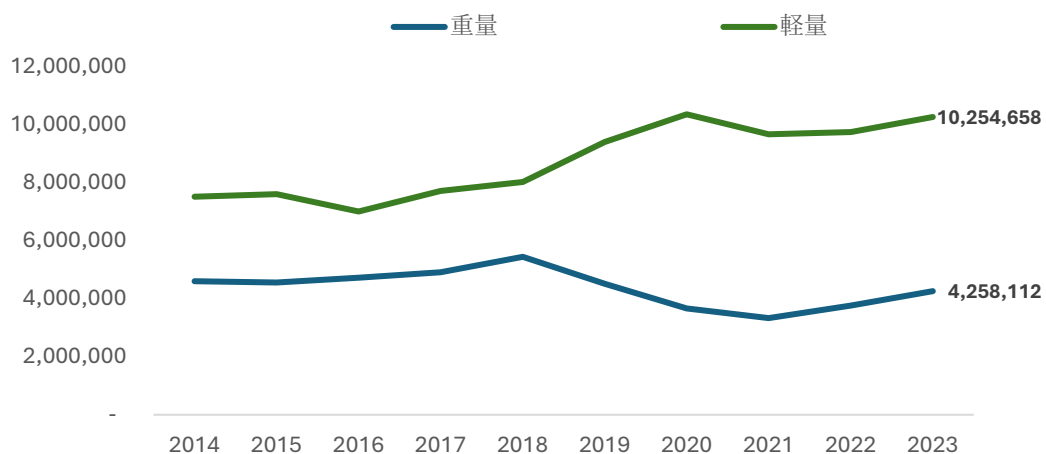
と畜された牛肉の平均と畜時重量は 226kg であり、隣国ウルグアイの 260kg と比べて低い。

図 9 と畜数の推移（2014-2023 年）



出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局

図 10 と畜時体重別のと畜数の推移（2014-2023 年）



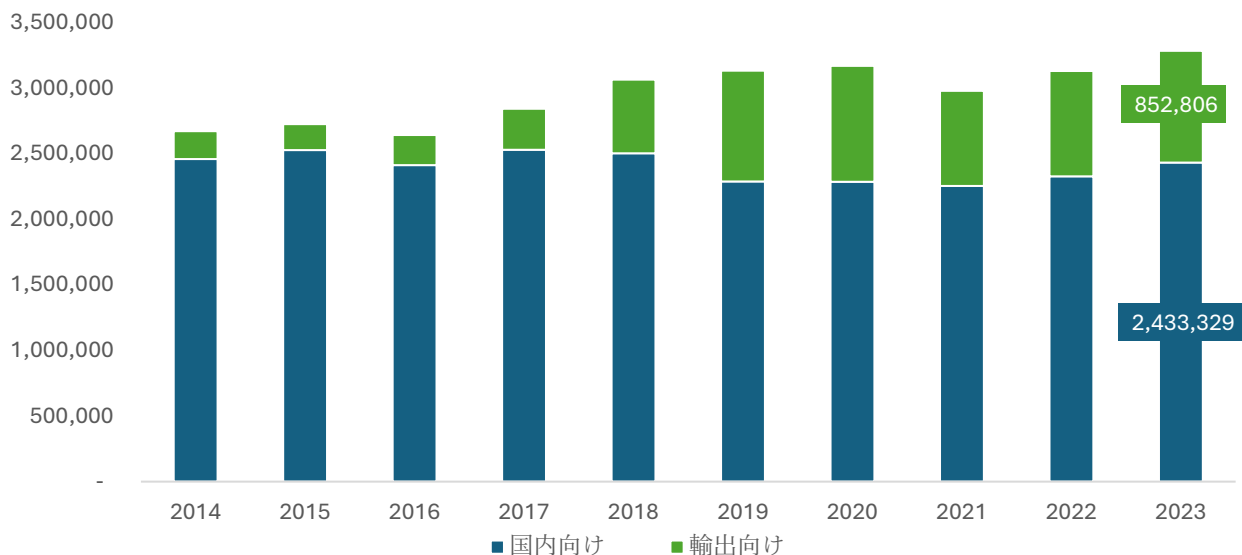
出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局（軽量：約 250kg、重量：300kg 以上）

3.3 牛肉生産量

牛肉は年間平均 300 万トン生産され、その 70～80%が国内消費向けである。2011 年から 2016 年の間、輸出は生産量の 10%未満であった。この期間、政府の主導により、自国民が安価な食肉を入手できるような政策が進み、輸出量が制限された。

アルゼンチンの牛肉産業の主な課題は、家畜の生産効率を向上させることで生産量を増やすことである。母牛 1 頭あたりの年間子牛生産頭数が増加すれば、生産者の収入も増え、飼養頭数を減らすことなく、より多くの牛をと畜できるようになる。また、屠畜時重量を増加させることで牛肉の総供給量を一気に増やすことができる。しかし、将来が不透明であるなか、多くの生産者が早期の投資回収に関心を持ち、肥育期間を可能な限り短縮する傾向があるため、この課題の克服は難しいとみられる。

図 11 仕向け別牛肉生産量の推移（2014-2023、トン）



出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局

4. 輸出入動向

4.1 輸出動向

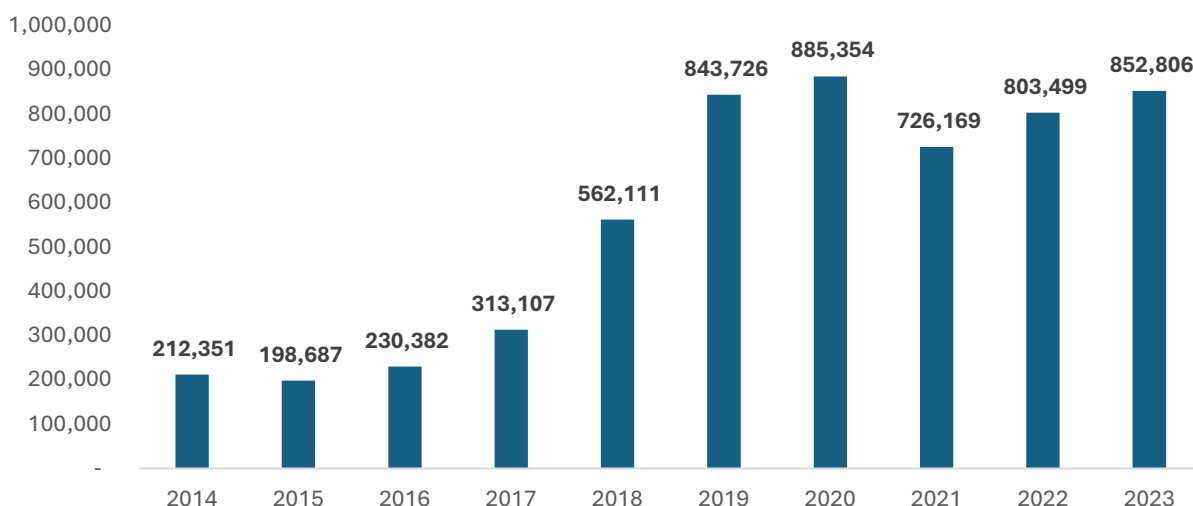
アルゼンチン産牛肉の輸出は政治的介入の強い影響を受けながら、過去 16 年間に大きな変動を経験してきた。

アルゼンチンは 2005 年、77 万トンの牛肉を輸出し、過去最高の牛肉輸出量を記録した。しかし、翌年の 2006 年 3 月、政府は 180 日間の牛肉輸出の一時停止を決定した。当時、国内市場の牛肉価格が高騰したが、それは輸出量が多かったことが理由であると政府が解釈したためである。その後、輸出登録制度と輸出税が適用されたこと、2011 年から 2015 年までの間、平均的な輸出可能量として、約 20 万トンと定められたことなどにより、輸出活動が抑制された。

2015 年末に市場開放を謳うマクリ政権が誕生すると、これらの輸出規制が緩和された。まずは 2016 年に輸出税が撤廃され、翌年に輸出登録制度が撤廃された結果、輸出が大きく躍進した。競争力のある為替レートと中国市場の強力な需要に牽引され、アルゼンチンは再び世界の主要輸出国の一つとなり、現在では世界第 5 位の輸出国となった。

2023 年 12 月には自由主義経済を謳うミレイ新政権が発足し、今後、牛肉の輸出規制がさらに緩和される見通しとなっている。牛肉については、これまで国内向けにのみ販売が許可されていた特定部位の輸出の自由化や輸出税の撤廃、その他の品目についても輸出税率の 9% から 6.75% への引き下げなど、積極的な対外貿易政策が開始されており、政府が新たな国外市場の開拓に乗り出している。

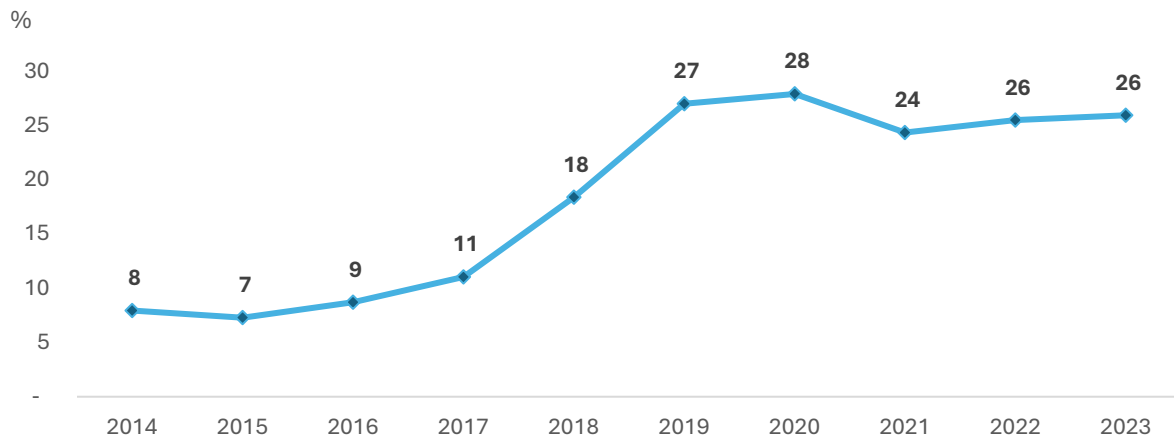
図 12 牛肉輸出量の推移（枝肉換算、トン）



出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

アルゼンチンでは、全生産量に対して輸出量が占める割合は歴史的に 30% 以下であった。約 70 年にわたり、国内消費は輸出による売上をはるかに上回ってきたためである。なお、牛肉の輸入はほとんどない。

図 13 牛肉生産量に対する輸出の割合の推移（2014-2023 年）



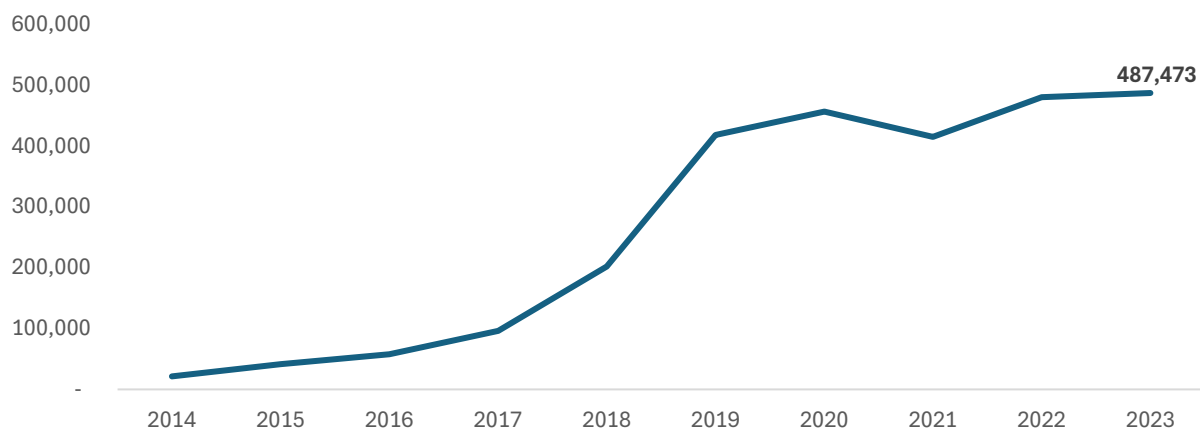
出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

4.2 主な輸出先国

直近 10 年間を見ると、中国がアルゼンチン産牛肉の主な輸出先国であると言える。現在では、アルゼンチンの全輸出量の 75～80%を占めている。ただし、中国向け輸出量が多いものの、一般的に、中国向けに輸出される牛肉は繁殖農場から廃用される痩せた牛に由来するものであることが多いため輸出額は低い。また、冷凍で輸出されることが多く、5 カットセット¹²の平均輸出単価は 4.2 米ドル／キログラム程度に過ぎない。なお、アルゼンチン産牛肉に対する中国側の関税率は 12%である。

さらに、去勢牛の輸出も徐々に始まっており、アルゼンチンの牛肉業界として期待を寄せている。

図 14 アルゼンチン産牛肉の対中輸出の推移（商品重量、トン）



出所）アルゼンチン牛肉促進研究所（IPCVA）

イスラエルは、中国に次ぐ 2 番目の輸出先である。同国には年間約 3 万トンの牛肉が輸出されている。な

¹² シン/シャンク、チャック、ショルダークロッド、ネック、チャックテンダー

お、アルゼンチン産牛肉に対してイスラエル側の関税は無税である。同国市場では、牛の前方部位のカットに対する需要があり、後方部位のカットに需要が集中する欧州などの市場と牛肉を効率的に組み合わせることで、輸出事業者にとって戦略的なビジネスとなっている。イスラエル向けの平均輸出単価は 5.7 米ドル／キログラムである。

欧州連合（EU）も、品質と価格の面でアルゼンチンにとって非常に良い市場である。アルゼンチンは、ヒルトン枠と 481 枠の 2 つの特恵関税枠を享受している。

ヒルトン枠

ヒルトン枠は EU における高級牛肉の低関税輸入枠として知られ、100%放牧飼養の牛であることを条件に関税率は 20%に設定されている。割り当てには、高品質とされる冷蔵骨なしカット肉はランプステーキ、ランプ、ロース、サーロインなど様々な部位が含まれるが、輸出事業者は主に高値で取り引きされる冷蔵のランプ、テンダーロイン及びロースといった部位を輸出している¹³。アルゼンチンの年間割当量は 29,389 トンと世界全体の割当量の 44%を占めるなど最も多く、米国とカナダが 17%と続く。最高級 3 カット（ロース、テンダーロイン、ランプ）の平均輸出単価は 14 米ドル／キログラムであり、中国向けやイスラエル向けの平均輸出単価を大きく上回る。

481 枠

481 枠は、食肉処理前 100 日以上の子牛を対象とした 45,000 トンの無関税割当枠である。2023 年現在の数量ベースでは、アルゼンチン、ウルグアイ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダには四半期ごとに 3,100 トン（年間 12,400 トン）、米国には独占的に年間 32,000 トンが割り当てられている。牛肉の大部分をカバーする約 18 種類の冷蔵または冷凍の骨なし牛肉カットを無関税で輸出できるため、価格面では非常に魅力的である一方、取引量が少なく、今後米国への割当数量が 35,000 トン（2027 年）まで段階的に引き上げられるため、他国への割当数量は 2027 年には 10,000 トンまで減少する予定である。この枠内で平均輸出単価は、9.1 米ドル／キログラムである。この枠はアルゼンチン産牛肉の輸出には貢献しているものの、アルゼンチンの業界関係者の間では、この枠の拡大を求める声は少ない。481 枠のお陰で高品質な牛肉の生産が国内で可能になった事に対して好評価しており、その牛肉を他の市場に回すことを考えている¹⁴。

なお、優遇枠外では、3 ユーロ／キログラムの関税に加え、取引価格に対して 12.8%の従価税が適用される。

チリはアルゼンチンの第 3 位の輸出先である。この市場の利点は関税率が無税であること、輸出先が地理的に近いことにある。最も輸出されているカット肉はクロッド、ネック、リブアイ及びナックルである¹⁵。平均輸出単価は 6.7 米ドル／キログラムである。

アルゼンチンは、米国に年間 20,000 トンの割当枠を持っている。これは主にトリミング（赤身の切り落とし）肉で、最終用途はハンバーガーミックスである。米国からの平均購入価格は、1 トン当たり 5,600 米ドルである。2022 年は北米市場で牛肉の在庫と生産量が大幅に減少した結果、輸出単価が上昇した。

¹³

https://apps.fas.usda.gov/newgainapi/api/Report/DownloadReportByFileName?fileName=Livestock%20and%20Products%20Annual_Buenos%20Aires_Argentina_AR2024-0013.pdf

¹⁴ インタビューより。

¹⁵ チリのカット肉と米国のカット肉の対照表：https://www.fsis.usda.gov/sites/default/files/media_file/documents/chile-list-of-accepted-cuts.pdf

その他の市場

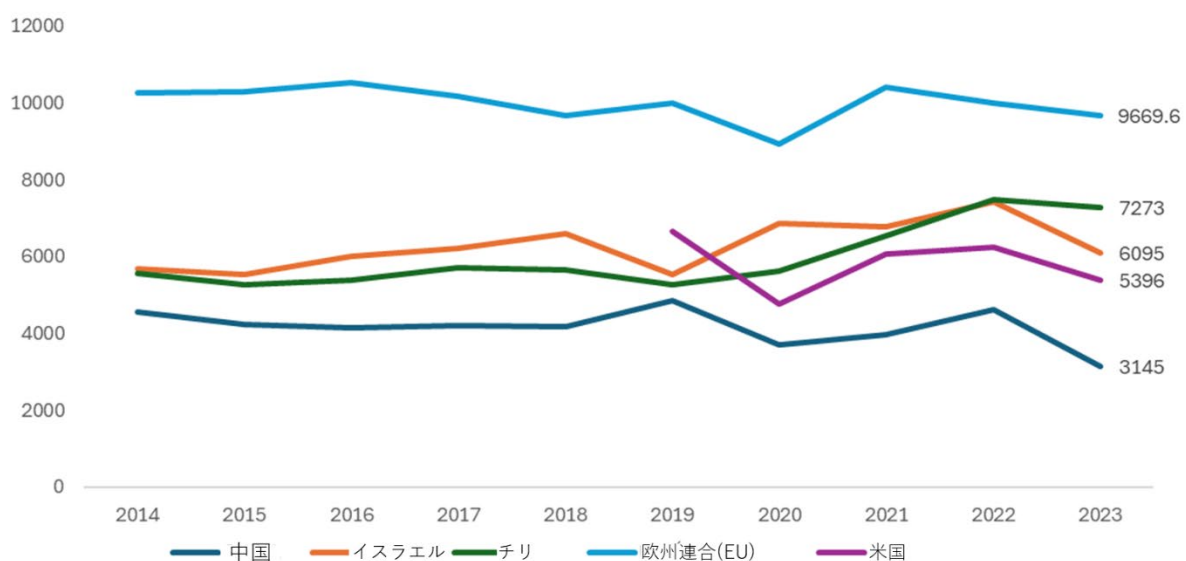
現政権は、アルゼンチン牛肉・子牛肉振興協会（IPCVA）や輸出業者コンソーシアムといった団体とともに、中国への依存を減らし、新たな市場を求める必要性を感じており、2024年には日本と韓国への訪問を行っている。両市場においては、検疫上の観点でアルゼンチン産牛肉は一部地域を除き輸出が停止されているほか、関税率が比較的高く設定されているため、現状の輸出量は限定的である。

現在、日本向け輸出が許可されているのはパタゴニア州のみである。主要な生産地であるブエノアイレス州などの中北部からの輸出は口蹄疫の関係で輸出が出来ない。しかし、現在ではアルゼンチン当局より、国際獣疫事務局（WOAH）によって口蹄疫ワクチン接種清浄地域として認定された北部地域からの脱骨した生鮮牛肉の輸入解禁の要請があり、要請に関する検討が行われているところである¹⁶。

アルゼンチンでは対日輸出拡大に関する関心が高い一方、輸送コストや輸入関税が高い状況の中で、中国のような巨大な市場にはならないとの意見が多く、むしろ中国市場の補完的な役割になるとの見方がある¹⁷。もし中北部からの輸出が解禁されれば、業界関係者は高付加価値の牛肉の輸出に関心があるようである。

他方で、業界としては輸出市場の開拓を考えており、その中でアジア（フィリピン、韓国等）の他にハラル肉が輸出出来る中東やインドネシア、マレーシア等に目を向けている¹⁸。

図 15 仕向け別輸出単価の推移（1トンの枝肉換算量当たりの米ドル、2014-2023年）



出所）アルゼンチン牛肉促進研究所（IPCVA）

輸出単価は商品の品質と貿易状況によって異なる。すでに述べたように、EUは最も高価な牛肉のカットである後方部位の輸出先であり、主にヒルトン枠と481枠という関税優遇枠組みを通じて輸入される。他方、主に中国は、淘汰牛のカットセットまたは骨なし牛肉全体に対するニーズが高い。

¹⁶ https://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/eisei/bukai_69/attach/pdf/240926-4.pdf

¹⁷ インタビューより。

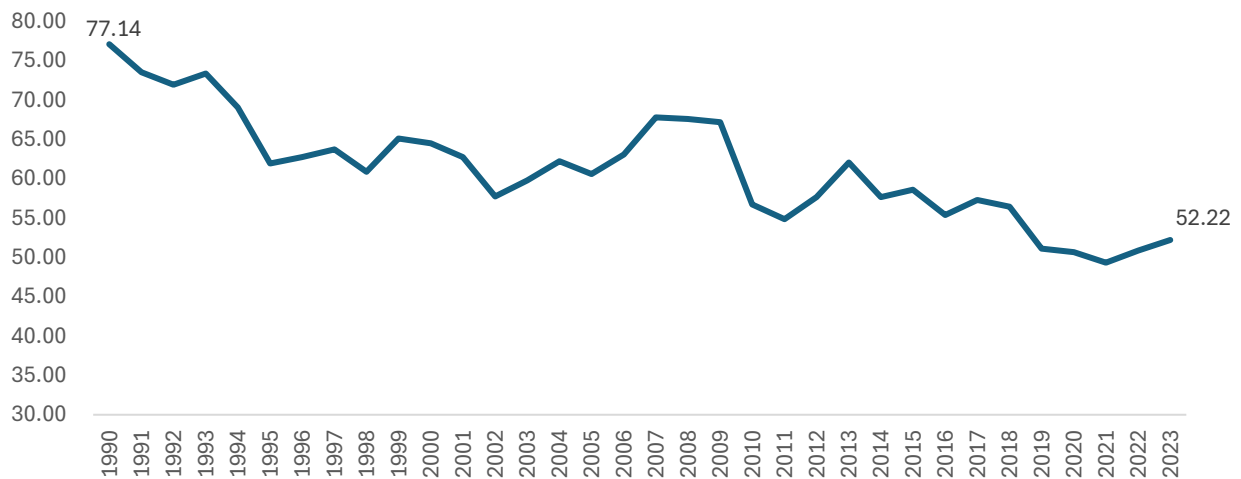
¹⁸ インタビューより。

5. 消費動向

5.1 食肉の消費動向

アルゼンチンは世界でも有数の牛肉消費国である。米国農務省 (USDA) が公表する「World Markets and Trade」によると、世界で 6 番目に消費量が多い。しかし、ここ数十年は生産量の低迷、鶏肉や豚肉の需要増加と供給拡大、消費者の購買力低下、消費動向の変化などにより、年間一人当たり消費量は減少傾向を示している。

図 16 年間一人当たり牛肉消費量の推移 (kg、1990-2023 年)



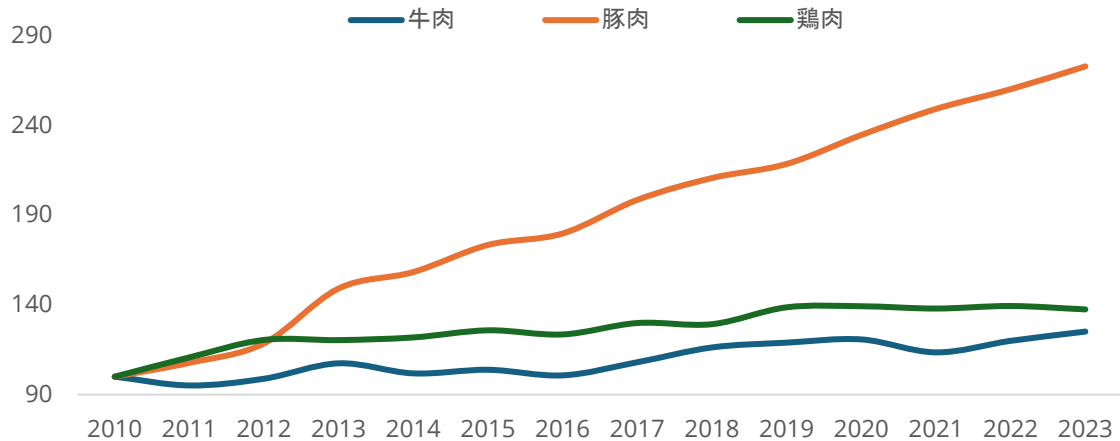
出所) アルゼンチン経済省パイオ経済局

食肉の生産量を見てみると、豚肉の生産量が近年で最も大きく増加しており、2000 年の 22 万 3,000 トンから 2023 年の 76 万 2,000 トンまで 3 倍以上に増加している。同期間に、年間一人当たり消費量も 8kg から 16kg に倍増した。

また、鶏肉の生産量は 2000 年の 90 万トンから 2012 年の 200 万トンまで大きく増加した。その結果、小売価格が大幅に下がり、同期間の年間一人当たり消費量は 27kg から 40kg まで増加し、2023 年には、46kg と増加を続けている。

この二つの食肉の生産量を押し上げた要因としては、アルゼンチンではトウモロコシを安価に入手できること、牛と比較して生産サイクルが短いこと、飼養が集約的であり個体管理や給餌管理の生産性向上技術が利用可能で短期的に成果が得られること、国内食肉産業の多様化と安価な食肉の国内生産の確保を優先する政府から設備投資等に対する低利融資支援を受けやすいこと、などが挙げられる。

図 17 食肉別生産量増加率の推移（2010 年を 100 とした場合）

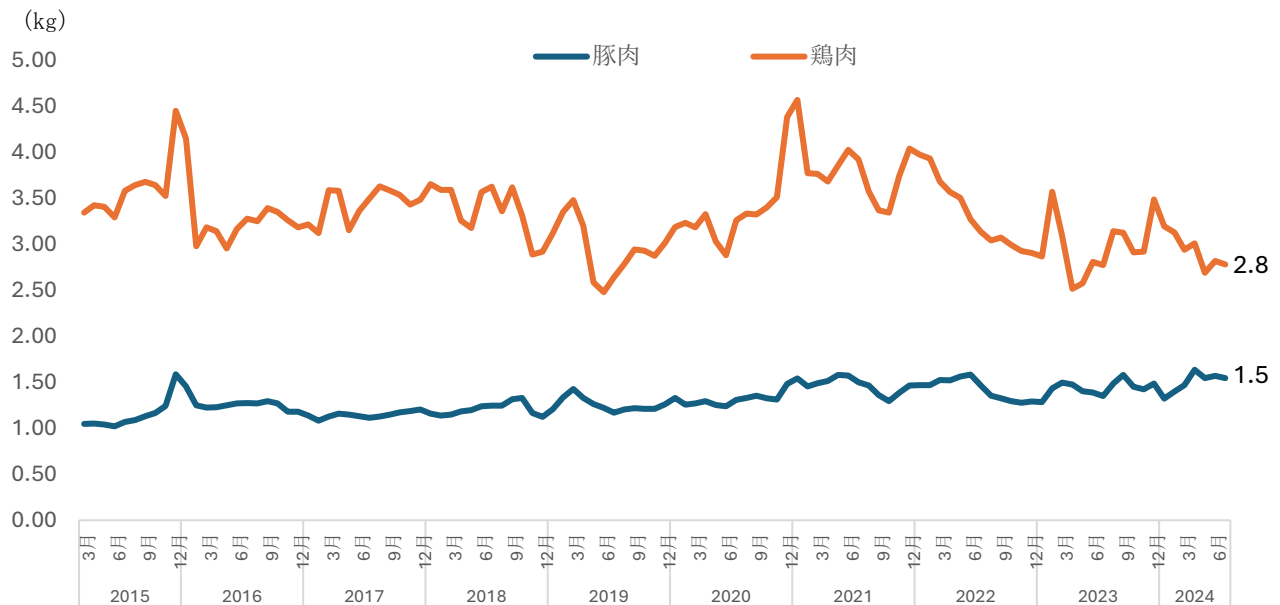


出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局

食肉間の価格差もまた、インフレと経済低迷にあえぐアルゼンチンの消費パターンの変化に影響を与えているといえる。

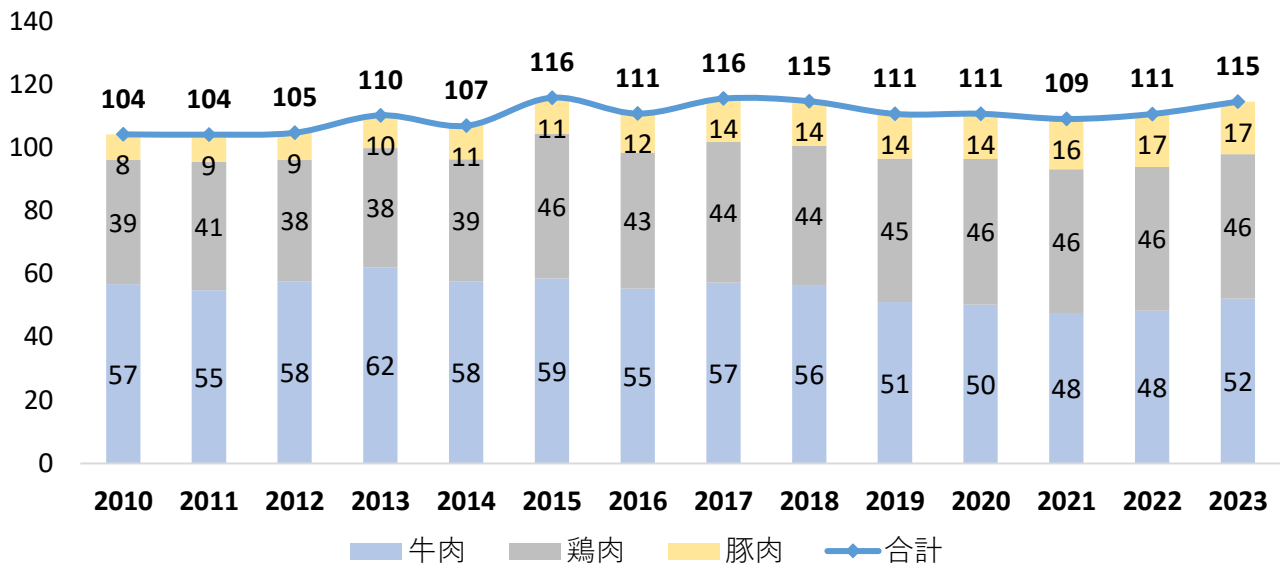
しかし、アルゼンチンの消費者の嗜好は常に牛肉であり、豚肉や鶏肉の価格は牛肉の価格に左右される傾向がある。つまり、牛肉価格が上昇すれば、より安価な食肉に需要がシフトすることで鶏肉や豚肉の価格も上昇し、これにより牛肉と豚肉・鶏肉間での価格差が縮まると、牛肉の需要が増加し、豚肉・鶏肉の需要が減少する。

図 18 1kg の牛肉小売価格に相当する鶏肉及び豚肉の重量の推移（1kg の牛肉に相当する量）



出所) アルゼンチン牛肉・仔牛肉振興協会 (IPCVA)

図 19 品種別年間一人当たり消費量の推移（kg、2010-2023 年）

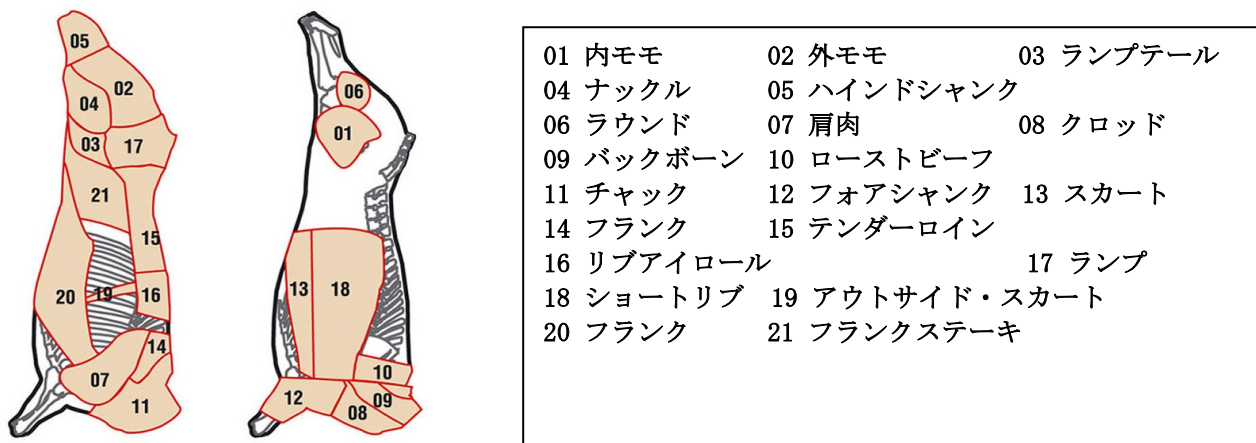


出所) アルゼンチン経済省バイオ経済局

5.2 牛肉の消費動向

アルゼンチンでは肉食文化が深く根付いており、国民にとって「食事のメインは食肉」と言われるほどである。その中でも、前述のとおり牛肉を多く消費する傾向にある。アルゼンチンで用いられる牛肉の部位と位置は図 20 のとおりである。

図 20 アルゼンチンにおける部位一覧

出所) アルゼンチン牛肉・仔牛肉振興協会 (IPCVA) ¹⁹

アルゼンチンの伝統料理には「アサード」と呼ばれるバーベキュー料理がある。弱火や遠赤外線によって3〜4時間と長時間かけて焼く点が特徴であり、庭のある家庭にはアサードの設備を備えていることが多く、週末には家族や友人との交流の場ともなっている。アサードでよく用いられる部位は、サーロイン・テンダーロイン（図 20-15）やリブアイロール（同 16）といったロイン系部位の他、ランプ（同 17）、ショートリ

¹⁹ https://www.produccion-animal.com.ar/informacion_tecnica/carne_y_subproductos/187-Laminas_de_Cortes.pdf

ブ（同 18）、フランク（同 20）、フランクステーキ（同 21）など「パリリエーロス」と呼ばれるバーベキュー定番の部位である。

また、アルゼンチンではパン粉、卵、調味料をまぶした牛肉を揚げて作る「ミラネサ」と呼ばれるカツレツも定番料理である。ミラネサでよく用いられる部位は、ウチモモ（同 01）、ソトモモ（同 02）、ナックル（同 04）その他、ひき肉料理もよく使われており、ハンバーガー、エンパナーダ（ミートパイ）、パスタソースなど、あらゆる調理に使われている。

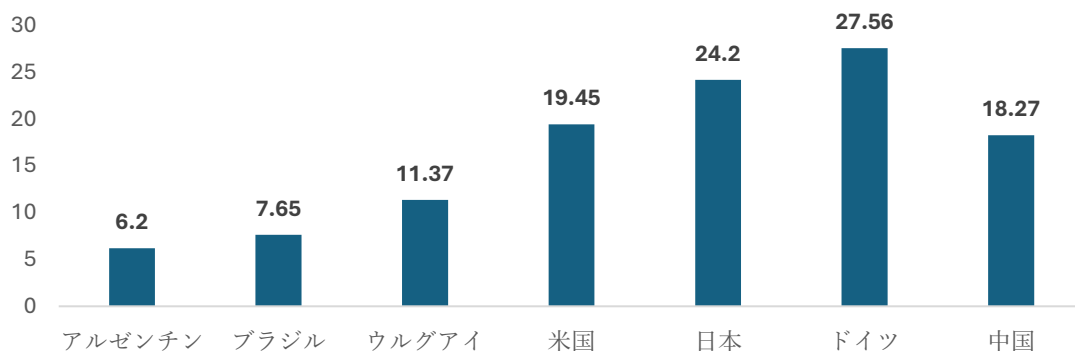
このように、アルゼンチンでは、国内消費の多い部位と少ない部位が明確に分かれており、国内消費の多い部位を国内、それ以外の部位を輸出に仕向けている。また、アルゼンチンの消費者は、柔らかさと風味を求めて、380kg以下の若くて軽い牛の肉を好む傾向があることも特徴である。

アルゼンチンにおける牛肉の小売価格は他国と比較して非常に低い。世界各国のあらゆる小売価格を比較するポータルサイト「Globalproductprices.com」によれば、80カ国の牛肉小売価格ランキングで、アルゼンチンは8番目に安価な国である。同ランキングは、各国における平均カット価格を比較したものであり、国によってカットや品質が異なることから、必ずしも正確に比較できるものではないことには留意が必要である。



アサードの様子

図 21 国別の主要牛肉カットの小売価格（USD/kg）



出所) GlobalproductsPrices.com

牛肉は地元では精肉店やスーパーマーケットを通じて販売されている。アルゼンチン政府の推定によると、売上の75%が精肉店、25%がスーパーマーケット経由である²⁰。精肉店では、枝肉の状態で運び込み、店舗で保管・カット後に販売することが多い。スーパーマーケットでは、加工事業者を経由して仕入れることが多く、主にトレーを用いたパッケージング製品として販売することが多い。近年では、スキンパックなどの真空パックによる包装も増えている。このような牛肉製品では、重量と価格、ブランド、さらには肉のトレーサビリティに関する情報も表示されている。

²⁰ https://www.argentina.gob.ar/sites/default/files/cndc_resumen_mercado_de_la_carne_vacuna.pdf

6. 政府による牛肉市場への介入

1946 年のペロン大統領就任以降、アルゼンチンは保護主義政策、大規模な公共支出と自由開放政策、緊縮財政の間で揺れ動いている。政権交代があるたび、経済政策が変わり、一貫性を欠いている。その結果、高いインフレ率や外貨不足、慢性的なペソ安、そして度々の財政赤字が続いてしまっている。

貿易政策及び為替政策も同様であり、政権の交代により、その規制の強弱がたびたび変わる。特に農畜産物は輸出競争力があり、主要な外貨獲得源である一方で、農畜産物の輸出量は国内の需給動向にも影響を与える。そのため、外貨獲得や国内の食料品価格の高騰対策として、時の政権がこれらの農畜産物に輸出税を課すなど、輸出量を制限するような政策がしばしば行われてきた。

牛肉は、アルゼンチン国民の日常的な食べ物であり、基礎的な食料の主要な部分を占めるという観点から、国内消費用の牛肉の価格と供給は歴代政権の重要な関心事項であった。消費者に牛肉を安価に供給するために、政府はしばしば牛肉市場に介入し、バリューチェーン全体の生産動向に大きな影響を与えてきた。具体的な政策としては、為替レートへの介入、輸出規制及び国内価格と供給量の義務的な統制が挙げられる。

6.1 為替レート

為替政策を見てみると、90 年のメネム大統領はインフレ対策として兌換法を制定し、民営化も行い経済を安定化させたが、95 年のメキシコ通貨危機の影響で通貨を切り下げざるを得なくなり、最終的には国際金融支援を受けることになった。さらに、99 年にはブラジル通貨危機が起こり、国内銀行からの大量の預金引き出しが発生、2001 年にはデ・ラ・ルア政権が預金引き出し規制を導入したため暴動が起き、アルゼンチンはデフォルトに陥った。その後の政権が兌換法を停止し、変動相場制へと移行した。

2000 年代のキリチネル大統領、そして、その死去後に大統領に就いた夫人のクリスティーナ・フェルナンデス政権は、資源および穀物価格の上昇局面の恩恵を受け外貨準備を積み増しペソ相場の安定に努めた。しかし、その一方で厳しい為替規制（外貨購入や外貨送金の規制）を導入した。その結果、公式の為替レートである公定レートと非公式の並行レート（ブルーレート）が併存する状態となった²¹。非公式レートは個人間の取引の際に参考となるレートであり、いわば市場実勢を反映していると言われている²²。

2015 年に発足した自由開放路線のマウリシオ・マクリ政権の政策により 2016 年初頭に為替規制が解除され、公定レートと並行レートは一本化された。しかし、2018 年に入ると米長期金利の上昇やトルコ危機を契機に資本が流出したことを受け、ペソの下落と外貨準備高の減少に歯止めをかける目的で 2019 年 9 月に再び外貨購入や送金、貿易取引決済などが制限された。その後続いた保護主義色の強いフェルナンデス大統領もまた、為替・資本取引規制を敷いており、2019 年以降、公定レートと非公式レートの乖離幅が大きく拡大している。

2023 年 12 月にミレイ新政権が誕生し、民間セクターの自由と国家の最小限の介入を掲げて発足した。対外貿易規制の即時緩和、積極的な貿易政策による世界への開放を謳っている。制度面では、今後の生産と輸出拡大のための条件作り着手し、政権誕生から数カ月で様々な規制を撤廃しているが、公定レートと非

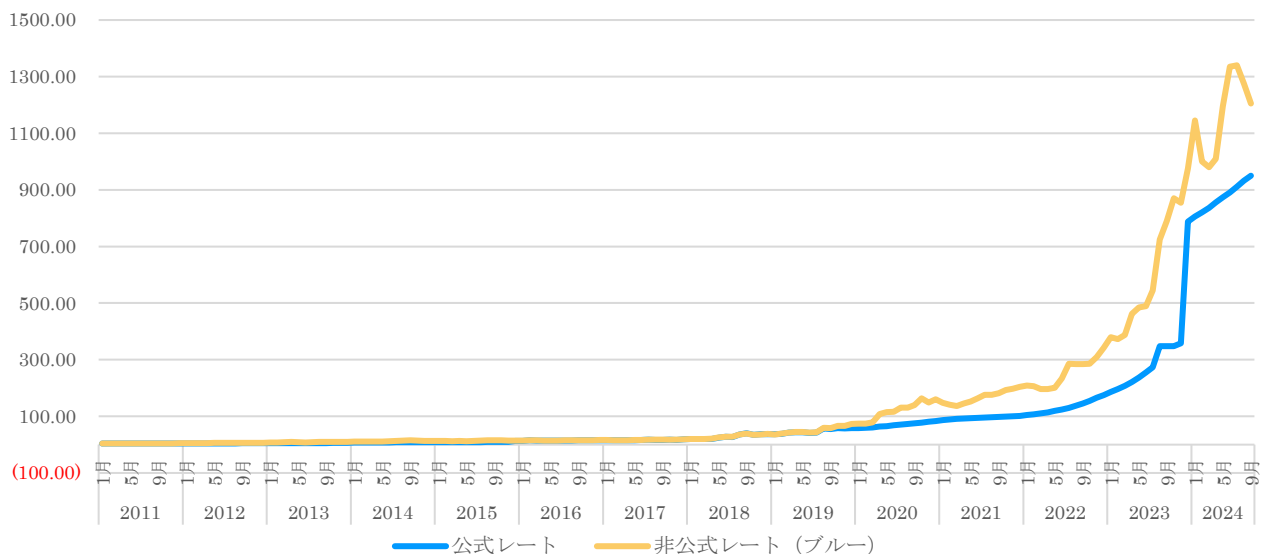
²¹ https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/01/f48dceb0c5e9a5e9/20200050.pdf

²² <https://www.iima.or.jp/docs/international/2013/234.pdf>

公式レートはまだ現存している。同政権は2025年中に公定レートの撤廃を目指している²³。

2011年から2024年までの為替レートを見てみると、ドル高ペソ安が継続的に続いていることがわかる。2012年から2016年までは公式レートと非公式レートの乖離が認められたが、マクリ政権が一本化を行ったことから、2019年まではレート動向が同一となっている。その後、マクリ政権末期に再び行われた資本規制の影響で、ペソの公定レートと非公式レートの乖離が再び拡大したが、新政権の誕生後は縮小傾向に向かっている。

図 22 対米ドル為替レートの推移（2011年1月～2024年9月、1米ドルあたりペソ）



出所) <http://estudiodelamo.com/cotizacion-historica-dolar-peso-argentina/>

6.2 輸出規制と国内価格の統制

畜産・食肉部門への介入は、ネストル・キルチネル政権（2003～2007年）とクリスティーナ・フェルナンデス・デ・キルチネル政権（2007～2015年）下にあった2005～2015年に特に顕著にみられ、一時マクリ政権（2015～2019年）で緩和されたものの、その後のアルベルト・フェルナンデス政権（2019～2023年）では再び強化に向かった。以下は主な規制の内容と推移である。

2005年の「価格協定」、国内市場で消費量の多いショートリブ、リブアイロール、内ロース、外ロース、ナックル、スカートの6つの部位の国内小売価格を10%引き下げるといったものだった。この措置は短期的には一定の成功を収めたが、10月以降、牛肉は再び上昇傾向に転じた。これを是正するため、供給側から価格を統制する政策が加えられ、同年11月からは、より長期間の肥育を行うことで、供給量を十分に確保するためと畜時重量の下限（生体中で300kg以上）が設けられた。しかし、価格の上昇に歯止めがかからなかったため、2006年には再び下限が引き上げられた。

さらに、国際価格と国内価格を切り離し、国内の出回り量を増加させるため、牛肉の輸出税が5%から15%に引き上げられた。

²³ <https://www.lanacion.com.ar/politica/javier-milei-anuncio-una-competencia-de-monedas-y-que-en-2025-el-cepo-se-termina-para-siempre-nid10122024/>

2006 年になり、更なる輸出規制が行われた。同年には経済省は 180 日間の牛肉輸出停止を発表した。ただし、ヒルトン枠（28,000 トン）及び二カ国間の輸出枠の分の輸出は例外となっていた。

2007 年には、こうした国内向けの十分な供給量と安価な価格の確保を目指す政府は、肥育を促進する政策を打ち出した。具体的には、より短期間で生産される牛肉の量を増やすため、高騰していたトウモロコシ及び大豆の購入費用を補填する政策をとった。

さらに、2008 年にも新たな輸出規制が実施され、食肉加工工場が輸出枠を得るためには、冷凍保管能力の 75%以上で稼働を行わなければならない、余剰分を国内向けに回さなければならないとなった。それを確認することを目的に、輸出登録制度（Registro de Operaciones de Exportación, ROE）が始まり、輸出の恣意的な遅延が行われた。

2009 年には国内貿易事務局が「ラ・バラタ」メカニズムを非公式に発足させた。これは、国内市場において、牛肉を手頃な価格で提供するため、政府と食肉加工業者との交渉を通じて、2.5kg の牛肉を輸出するたびに、1kg の食肉を合意された国内価格で提供しなければならないというメカニズムであった。その後、2.5 kg から 3.5kg まで拡大され、この非公式な規制は 2014 年 4 月頃まで続いた。

こうした介入メカニズムはその後繰り返され、常に牛肉の価格を消費者が入手しやすい水準に維持するという目的に沿って行われた。多くの場合、これらは裁量的に適用されたため、さらに不確実性が高まった。2013 年から 2015 年にかけて、牛肉の輸出量は年間約 20 万トンと低調に推移したが、これは偶然ではなく、輸出許可の公式管理の結果であった。

2015 年にマクリ政権となり、牛肉の輸出税が撤廃され、牛肉輸出は 325%増加した。しかし、その後、経済状況が悪化した 2018 年には、輸出される牛肉の価格 1 ドルにつき 3 ペソの手数料が導入された。

2019 年に始まったフェルナンデス政権では輸出税が再開され、牛肉の税額は 9%となった。その後も、2021 年 5 月に再び牛肉の輸出を 30 日間禁止された。そして、国の経済状況が悪化すると、付加価値税 (IVA) の還付が遅れて、生産者のキャッシュフローが大幅に悪化した。

2023 年 12 月に発足したミレイ政権は、発足とともに輸出量の規制を撤廃し、2024 年 8 月に輸出を 9% から 6.75%に引き下げた。さらに、禁止されていた部分肉の輸出も再開されており、現在残っている政府規制は、特定の牛肉カットの輸出制限、公定レートと為替規制である²⁴。

²⁴ インタビューより。

7. 食肉業界

7.1 牛肉のバリューチェーン

牛肉のバリューチェーンには、生産から小売、輸出に至るまで多様なアクターが存在する。アルゼンチンではバリューチェーンは非常に断片化されており、価格を形成できる企業は存在しない。さらに、事業者間でも、生産規模、土地や飼養方法、統合度合が異なり、非常に多様である。

牛肉のバリューチェーンは、いわゆる遺伝子農家（Cabaña）から始まり、繁殖農家に精液や受精卵を供給する。繁殖農家は生産性の低いほ場に立地しており、彼らの目標は母牛 1 頭につき年間 1 頭の子牛を生産することである。生後 6 カ月齢で母牛から離乳した子牛は、肥育農家（Recría）または穀物肥育農家（Terminación a corral）に販売される。

肥育農家（Recría）は、通常改良された牧草で飼養され、季節的な緑地や多年生牧草が使用される。子牛の骨と筋肉を発達させ、国内消費用または輸出用の去勢牛として販売するための最終的な肥育を行う。

穀物肥育農家（Terminación a corral）に進む離乳子牛は、約 140 日間集中的に肥育され、340～390kg で出荷される。また、主に国内で消費される。

- 牧草 100%による飼育方法もある
- 歴史的にみても、国内生産量の 25～ 30%しか輸出されていない。

牛は地元の市場から食肉処理場に販売される。食肉処理場は国内消費用のみ、または輸出用と国内消費用の両方を生産する処理場がある。食肉は加工された後、地元の精肉店に枝肉の形で販売される。スーパーマーケットへの販売は、トレー詰めか真空パックのカットである。

輸出は主に真空パック、冷蔵、冷凍カットである。中国に送られる痩せた牛は、骨抜きにされた部分肉を集めてセットで売られることが多い。

生産段階では、牛は個人間で直接取引されるか、仲介業者を通して取引される。後者の場合、直接（圃場から圃場へ）行われることもあれば、家畜を公正なオークション会場に持ち込んで間接的に販売することもある。食肉販売の場合、カニユエラス（ブエノス・アイレス）の市場が国内の主な価格基準となる。主に火曜、水曜、木曜に運営され、1 回の取引で約 1 万頭が集まる。

生産者間では、生体をバルクで輸送しており、家畜の総価値（価格×重量）によって 1kg 当たりペソで取引される。生産者と食肉処理施設間の取引の場合、価格は通常、歩留まりに基づいて、冷と体重 1kg 当たりのペソで合意される。

価格は需要と供給の自由競争によって決まる。カニユエラス農畜産市場が、国内消費用および中国向け牛の価格の日々の基準となっている。欧州連合（EU）向けの去勢牛輸出については、牛の競りを通さず、生産者と食肉処理場の間で直接取引される。価格は通常、と畜後に冷と体重 1kg 当たりのペソで合意される。この価格に明確な基準はなく、牛の入手可能性、食肉処理場の必要性や緊急性、あるいは関税上の優遇措置



精子の冷凍保存容器（Las Lilas）



繁殖農家の様子（La Pastoriza）

がある割り当て枠内での販売の可能性によって決まる。例えば、割当枠内での輸出に向けたと畜が行われる時期には、通常、去勢牛の購入ニーズが高まり、価格は堅調になる傾向がある。

企業は、繁殖、飼育、仕上げの全生産サイクルを行うことができる。家畜は自社、または借りた圃場に移動させる。穀物肥育の場合、肥育農家が牛舎を他の生産者に貸し出すことが多い（「ホテル契約」）。

また、少数ではあるが、繁殖から精肉店やスーパーマーケットでの販売までを自社ブランドで行う、完全に統合された企業もある。

7.2 生産コスト

アルゼンチンでは、生産システムは集約型と肥育型に分けられる。前者は穀物飼育を指し、後者は牧草肥育を指している。SENASA によれば、穀物飼育農場は 1,118 事業所ある。それ以外の飼育場は牧草肥育であり、または穀物肥育としての登録を行っていないところである。繁殖は主に自然の牧草地で行われる。

生産コストは、飼育方法が集約されるにつれて増加する。牧草肥育は最も経済的であるが、生産実績が分散し（気候リスクもある）、投下資本を回収するのに時間がかかる。

集約型の飼育は生産コストが高く、飼料の主成分は全粒または破碎したトウモロコシで、タンパク質と混合する。これらのシステムの利点は、生産の安定性、得られる肉質の均質性、投資の回収期間の短さにある。また、必要な土地も少なく、農業活動を並行して行うジョイント・ベンチャーに非常に適している。商品価値の低いトウモロコシや、港から遠いため輸送・商業コストが高いトウモロコシに対して、付加価値をつけて販売するための戦略的事業でもある。

表 9 飼育方法別の生産コスト

	繁殖	肥育	長期肥育	穀物肥育Ⅰ	穀物肥育Ⅱ	穀物肥育Ⅲ
搬入時体重 [kg.]		180	180	180	270	330
出荷時体重[kg.]	170	270	330	340	380	470
飼料	牧草	牧草	牧草	トウモロコシ+タンパク質	トウモロコシ+タンパク質	トウモロコシ+タンパク質
飼養期間	549	150	270	131	99	114
増体1kgあたりの生産コスト [US\$/kg.]	1.54	1.27	0.95	1.79	1.91	2.04

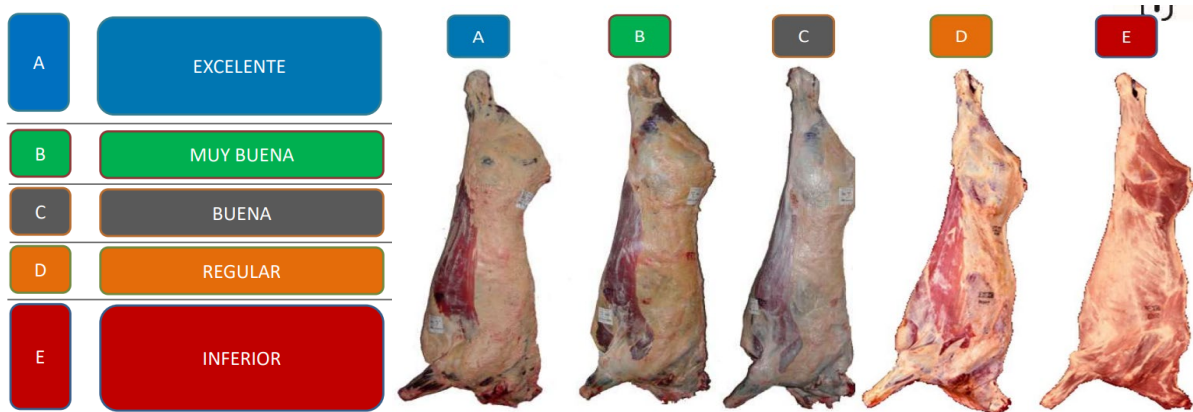
出所）AZ Group

7.3 食肉の規格

アルゼンチンでは牛の格付けは義務付けられているが、牛肉の格付けは義務付けられていない。現在、食肉品質プロトコルの作成が進められているところである。原則的には、公的な格付業者によるアナログ的なシステムであり、今後、客観的な測定技術が導入される予定である。

肉用牛の分類は性別と年齢（歯列）によって行われる。コンフォーム（筋肉と骨格の比率）、フィニッシュ（脂肪と筋肉の比率）、コンタクション（打撲傷）が評価される。

図 23 牛の筋肉と骨格の比率による格付け



出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

図 24 と畜時による格付け



出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

肉用牛の格付けは義務であるが、現在 78 の食肉処理施設のみがこれを行っており、全国の食肉処理量の 66% を占めている。資格のある格付業者の不足が、格付システムの導入が進まない主な理由である。研修の場を増やすため、各分野の会議所や生産団体と協力し、独自のコースを全国で提供できるようにすることが提案されている。それと同時に、格付け業者は食肉処理場の従業員でなければならないという条件を撤廃し、さまざまな企業にサービスを提供するスペシャリストが出現する可能性を与える予定である。

なお、現在策定中である食肉品質格付け制度は下記の概要となる見込みである。

前提条件：

1. 年齢：歯が 6 本生えるまでの若い雄（去勢を問わない）または雌
2. 牛の格付け：A 種、B 種、C 種のいずれか。
3. 背脂肪の厚さ：1 以上（最低 5mm）
4. Ph：5.9 以下
5. 挫傷：挫傷なし。

上記条件を満たした牛肉は色と脂肪、霜降り（筋肉内脂肪）、ステーキの表面積、脂肪の付き具合によって格付けされる。この新しい制度は米国の USDA 及び豪州の牛肉格付け制度を参考にしている²⁵。

²⁵ インタビューより。

図 25 牛肉格付けラベルの例

CARNE TIPO   Sistema Argentino de Clasificación y Tipificación	Edad Vq4		Estab: 26531 CUIT: 30-56321326-6 Tipificador 20-26520197-1 Faena 10/06/2019 Tipificación 11/06/2019		
	Tip. Res. B - 2	Cont. 000			
	Garrón 291	Peso 135	Tropa 125465		
Marmoleo: 3 EGD: 6 mm		Color Musculo: 3 AOB: 67 Cm²	Color Grasa: 2 PH: 5.8		

出所）アルゼンチン経済省バイオ経済局

7.4 アルゼンチン産牛肉の品質

アルゼンチンの牛肉は歴史的に 100%牧草飼育によるものであった。牝牛は生後 3 年目までに輸出体重に達する。しかし、以下の理由により生産システムが変更された。

耕作地の拡大：従来の牧草地には農業適性があるため、農産物価格の上昇以来、土地の再配置が行われている（農業への転換が進んでいる）。

政府による輸出への介入：政府による輸出の禁止や輸出量割当、将来の不確実性が原因で、生産者は牧草によって重量のある牛を肥育することへの関心が薄くなったことから、国内向けに低体重の牛を生産する方針へのシフトを加速させた。これにより、より短期間で理想体重に肥育することが可能な穀物飼育が増えた。

アルゼンチンのマクロ経済：マクロ経済の不安定さが長期的な計画を思いとどまらせていたが、穀物肥育では資本の固定期間の短縮が可能であることから不確実性が減少した。

品質：フィードロットでの肥育では、気候のリスクを軽減し、異なる時期に均質な品質の牛を生産することが可能であり、生産の安定性が高いことから生産者の間で高く評価されている。また、消費者は集約的な飼養システムで実現する白い脂肪を選ぶ傾向にある。

トウモロコシの入手：アルゼンチンは世界第 4 位のトウモロコシ生産国（5,000 万トン）である。また、穀物には 12%の輸出関税がかけられているほか、港から遠く離れた農業生産者にとっては、輸出にかかる運賃や商業コストが大きいと、年間で約 2,000 万トンのトウモロコシが国内の家畜飼料に仕向けられるとの推計がある。その結果、多くのトウモロコシが家畜の消費に回される。アルゼンチンの畜産農家にとっての穀物価格は非常に競争的である。

現在、輸出用のアルゼンチン牛肉は、主に生後 30 カ月未満の、体重 440～480kg の去勢牛から生産されている。飼料は主に牧草であり、320～340kg に達するまで、牛は季節的な緑の牧草地や多年草の牧草地、改良された畑で自由に餌を食べる。その後、440～480kg までは、主にとうもろこしと濃厚タンパク質を給餌される。なお、アルゼンチンではホルモン剤や成長促進剤は使用されていない。

7.4.1 アルゼンチン産牛肉のイメージ

世界におけるアルゼンチン産牛肉のイメージは、同国の長い畜産の歴史と関連している。アルゼンチンにおける食肉輸出は、1876 年 12 月、ブエノス・アイレス港に最初の食肉加工船「Le Frigorifique」が到着したことに始まる。冷蔵倉庫が改善された結果、英国資本が入国し、インフラに投資したため、食肉輸出産業が発展した。19 世紀末にはアルゼンチンの畜産は、オーストラリアやニュージーランドといった他の世界的な生産国に大幅な遅れをとっていた。アルゼンチンの肉牛を代表するアバディーン・アンガス種の黒毛種がアルゼンチンに導入されたのは、1879 年のことである。1920 年には、赤毛のヘレフォード（？）種が導入された。

当初、アルゼンチンの牛肉加工業界は輸出志向であり、アルゼンチン・パンパ地方が牛肉の主な供給地であった。主な輸出先は英国であり、事業はヨーロッパ資本の少数の企業に集中していた。長年にわたり、牛肉輸出事業は新しい市場環境に合わせて変化してきた。そして、アルゼンチン国民の購買力が向上し、食肉がより多く消費されるようになった一方では、国際的なレベルで新たな競争相手が参入し始め、世界の供給が多様化した。

アルゼンチン産牛肉が世界的に認識されている主な特徴は以下のとおりである：

気候と土壌： 自然畑、牧草地、牧草地の生育に適した土壌を持つ広大な生産地帯。主要産地である中部地域の温暖な気候、十分な降雨量等が牛の生育にとって非常に良い。

遺伝： アバディーン・アンガス種とヘレフォード種という英国原産の遺伝子を取り入れることで、肉の品質を向上させている。柔らかさ、色、風味、霜降りは、アルゼンチン牛肉の主な特徴である。

食品の安全性： SENASA は、食の安全と安心を保証する機関として国際的に認められている。アルゼンチンは、国際獣疫事務局（WOAH）により、牛海綿状脳症（BSE）のリスクを無視できる国として分類されている。また、国の中央部と北部でワクチン接種を行い、口蹄疫のない状態を維持しているほか、南部のパタゴニア地方では、ワクチン接種なしで口蹄疫の排除が宣言されており、2006 年以降、全土で口蹄疫の発生は記録されていない。

8. 牛肉需給の長期動向分析

アルゼンチン政府は長期的な動向分析を公表していない。政府関係者への取材によれば、先行きが不透明なアルゼンチン経済では長期的な予測を立てる事が難しいという背景があるという²⁶。一方で、牛肉業界のコンサルタント会社であるAZ Groupが独自の分析で2027年までの需給予測を分析しているため、この章では、同社の分析を中心に解説する。

同社が分析を行うにあたり、以下の点を前提としている：

- ① 新政権による市場開放政策の推進
- ② インフレ率及び金利の低下
- ③ 為替相場の自由化（公定レートの撤廃）
- ④ 為替規制の撤廃（外貨の自由な売買）
- ⑤ 特定のカット部分肉の輸出規制の撤廃

上記の為替規制や輸出規制が撤廃されれば輸出への足かせがなくなり、さらにインフレ率と金利が低下すれば、国内市場の価格に不透明性がなくなり、投資が行いやすくなるため、市場が回復に向かうとみられる。そのため、AZ Groupでは、前述のとおり、現政権の政策を踏まえ、国内向けの生産量と輸出向けの生産量がともに増加すると見通している。増加するのは、去勢牛のみならず、対中国向けの母牛の生産も増えると予測している。すでに見てきたとおり、アルゼンチンでは母牛1頭・1年当たりの子牛生産頭数は0.6頭と少なく母牛の生産性は低い。さらに、と畜時生体重量も226kgと小さいため、生産性向上の余地がある。それを促すためには、農場への投資と予測可能な市場が必要であるが、AZ Groupでは、この二つの要件は現在のミレイ政権において確保できるとみている。

他方で、生産量増加の制約要因として挙げられるのは、2023年の過剰なと畜と2024年の干ばつである。そのため、母牛の飼養頭数は一時的に減少するとみられる。また、アルゼンチンペソの米ドルに対する増価傾向の中、アルゼンチン産の輸出価格の競争力が低下する可能性がある。

上記を踏まえて、AZ Groupの2027年までの需給予測は下記のとおりである。

表 10 飼養頭数の予測

	母牛	雌牛	育成牛 (NT)	育成牛 (NO)	子牛（雄）	子牛（雌）	雄牛	非去勢育子 牛	合計
2023	22,404,367	7,358,727	2,329,624	4,716,023	7,337,163	7,347,628	939,268	351,092	52,783,892
2024	22,238,437	7,898,480	2,108,817	4,792,767	7,243,042	7,319,797	958,553	345,079	52,904,972
2025	22,164,538	8,010,342	2,527,535	4,860,644	7,300,005	7,377,364	972,129	349,966	53,562,523
2026	22,678,372	8,054,732	2,737,045	4,301,071	7,385,985	7,464,255	977,516	351,906	53,950,883
2027	22,842,804	7,916,213	3,150,732	4,135,335	7,557,213	7,637,297	984,604	354,457	54,578,654

出所）AZ Group

母牛：と畜時に門歯は4本より多い雌牛

雌牛：と畜時に門歯4本までの雌牛

育成牛（NT）：と畜時に門歯4本までの去勢牛

育成牛（NO）：と畜時に門歯は4本より去勢牛

子牛（雄）：乳歯の雄牛

²⁶ インタビューより。

子牛（雌）：乳歯の雌牛

雄牛：と畜時に門歯は 2 本より非去勢牛

非去勢育成牛：と畜時に門歯 2 本までの非去勢牛

表 11 需給予測

	飼養頭数	と畜頭数	と畜時生体重 (kg)	生産量 (MT)	人口	一人当たり年間 消費量 (kg)	国内消費量 (MT)	輸出量 (MT)
2023	52,783,892	14,512,770	226	3,278,253	46,654,581	52.22	2,425,448	852,806
2024	52,904,972	13,650,000	228	3,112,073	47,067,641	45.97	2,163,656	948,417
2025	53,562,523	13,226,243	235	3,108,167	47,473,760	46.11	2,189,011	919,156
2026	53,950,883	13,658,443	242	3,305,343	47,873,268	46.95	2,247,633	1,057,710
2027	54,578,654	13,757,475	245	3,370,581	48,266,524	46.09	2,224,584	1,145,998

出所) AZ Group